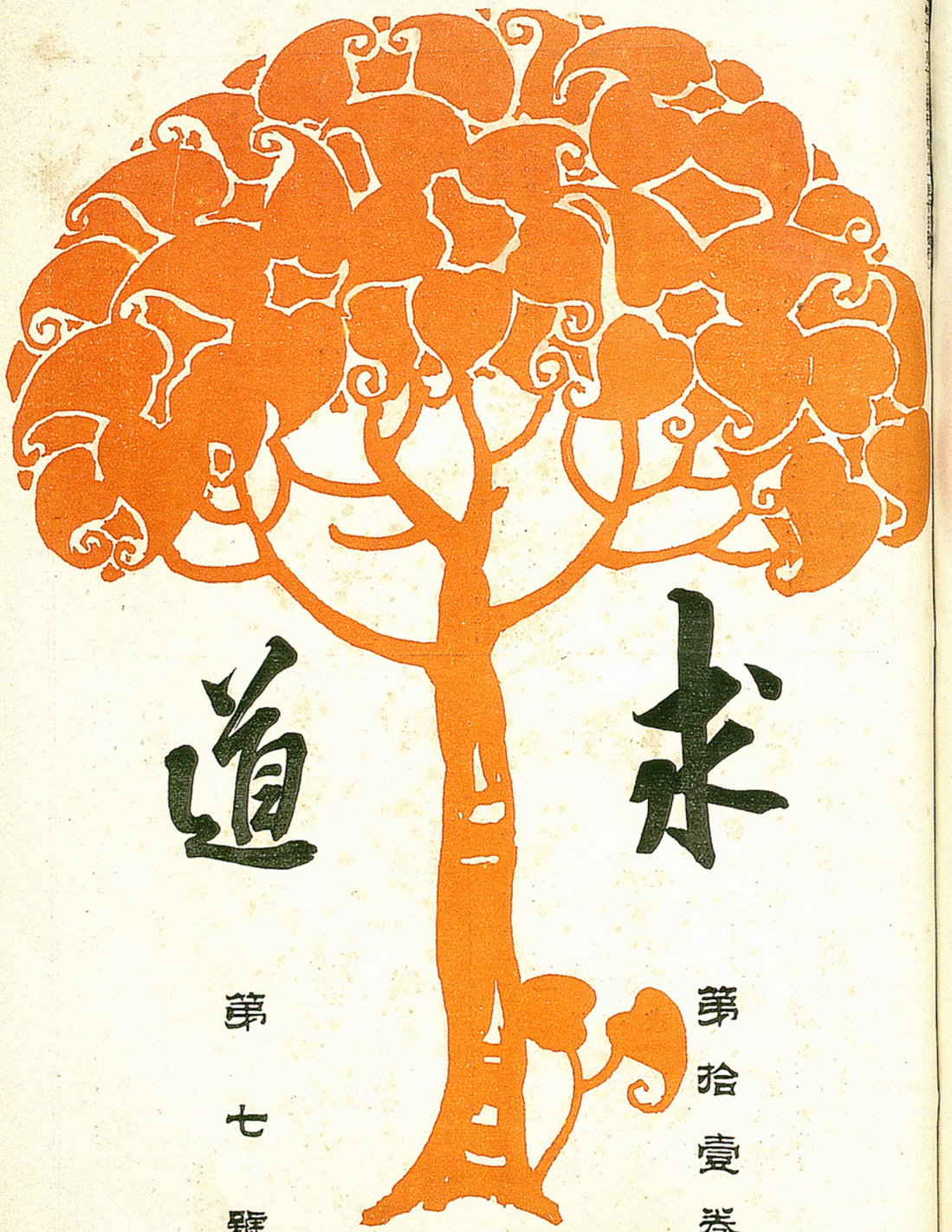

道教

第拾壹卷

第七號

求道第拾壹卷第七號目次

求道

◎如來とは何ぞや　講義　近角常觀

◎『教行信證』信卷（菩提心釋より）　近角常觀

第五席　願成就釋

一、願成就文　二、十八願は逆緣の願　三、佛教と他教との根本的相違點　四、本願三心の意義　五、惡いまゝでもなく、善くするのでもない　六、一念の味ひ　七、辨圓が悔悟の一念　八、姨捨山の譬喩　九、山陽の邁進　一〇、親が最後の一言　一一、一念の時剋につきて　一二、聞其名號　一三、即得往生

◎歎異鈔　第十三章（承前）　近角常觀

告白

◎知り拔いて居るから可哀相でとの思召が　增田八重子

◎信仰を求むる方式をのみ考究致居候おろかさ　行村吉之助

講話

◎超絕の力　近角常觀

時報

◎求道講話概況

講話

毎日曜午前九時　求道學舍（本郷區森川町一番地）

毎土曜午後二時　第二求道會（九段坂佛教倶樂部）

毎月二日午後七時　第三求道會（日本橋蠣殼町説教所）

如來とは何ぞや

○如來とは何ぞやといふ問は信仰問題に於ける最初の問にして且つ最終の問である、否信仰問題に於ける唯一の問である、若し此問に對して中心滿足なる信念を得られたならば夫こそ眞實の信仰である、主觀であるとか、客觀であるとかいふ概念の邪魔する間は怪しいものである。

○如來を如實に知るといふことが信仰である、曇鸞大師は如實修行相應といふことを言はれた、其如實といふは如來は是れ實相身なり、是れ爲物身なりと知る也と言はれた、千古の大敎訓である、實に如來を如實に如來也と知りたるが信仰である、信順である、信知である、觀知である、如實修行である、名義相應である。

○全體漢文で書きたるものは六ヶ敷いことに思ふて其眞味を味ひかねる弊がある、和文に書きたるものは、知らず識らず、疎かにするが爲に亦深長なる意義を味はずして捨てゝ置く癖がある、今曇鸞大師の如實修行名義相應を味はざるは漢字の爲に消化し難いのである、御文を拜讀して何時も南無阿彌陀佛の講釋の如く考へるのは此如實修行名義相應の謂れたることを忘れて仕舞ふからである。

○御文の御敎化は如來を如實に知らせんが爲である、南無阿彌陀佛夫自身が如來の眞義を顯現したまひたるものにして、且其如來の思召をいたゞくこと自身が畢竟南無阿彌陀佛に外ならぬことを示されたるものである、かく云へばとて徒らに宗學研究と思ふべからず、否繁瑣的、訓話的、系統的の學問となりたのが、既に如實にいたゞかぬのである、主觀であるとか客觀であるとかいふ穿鑿は饅頭が甞いか舌が甞いかといふ樣なものである、甞いものは甞いといふより外はない、勿論饅頭を食ふたのじやもの、饅頭が甞くなくてどうなるものか、さればとて食はずに甞いことが分るものか、甞い講釋や、論議をするよりは食ふが肝要である。

○善導大師は唯觀念佛衆生、攝取不捨故名阿彌陀と釋された、親鸞聖人は之を和讃に譯して、十方微塵世界の、念佛の衆生をみそなはし、攝取してすてざれば、阿彌陀となづけたてまつると言はれた、是實に如來の眞意義を盡したもので

ある、實に念佛衆生、攝取不捨といふことが阿彌陀佛の意義である、而も唯觀の文字を忘れてはならぬ、親鸞に於きては、たゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしとよきひとのおほせをかうふりて、信ずるほかに別の仔細なきなりといふことが、即ち如來の意義である、阿彌陀の名義である。

○善導大師は唯有念佛一蒙光攝、當知本願最爲強といひ、但有專念阿彌陀佛一衆生、彼佛心光常照是人攝護不捨、總不論照攝餘雜業行者、此亦是現生護念增上緣とある、而して此意を以て法然聖人は選擇集には彌陀光明不照餘行者、唯攝取念佛行者之文と仰せられた、して見れば十方衆生何れも唯念佛の一を以て攝取さるゝといふことである、言ひ換へたならば、如何なる善人と雖、善其物が此絶對の慈悲に對して見れば善として役に立たぬ、如何なる惡人と雖此絶對の惠を蒙りて見れば惡として退けられぬ、大陽の前には如何なる燈も其光を失ひ、如何なる場所も其闇を破る、人間の爲す所の善業も如來の惠の前には何等の効もなく、人間の爲す所の惡業は如來の惠の前には如何なるものも見捨てらるゝことなし、唯如來の惠に接することが肝要である、唯如來の御聲を聞くことが肝要である、唯念佛である、唯信心である、彌陀の本願には老少善惡の人をえらばれず、唯信心を要とすとしるべしである。

○人生此の如き絶對の惠を蒙りて見れば所謂善もほしからず、惡もおそれなしといふ境に達するのである、善のほしからざるは如來の本願に滿足して見れば此上に加ふべき善もなく、惡のおそれなしといふは如來の大悲に融かされて見れば、猶氣にかゝるべき惡もないのである、畢竟人生の善惡は如來大悲の惠の下には皆消え失せて旭の前の雪の如くである。

○彌陀智願の廣海に、凡夫善惡の心水も、歸入しぬればすなはちに、大悲心とぞ轉ずなる、清濁大小樣々の河の大海に入りぬれば同一鹹味となるが如く、我々凡夫善惡の心水も如來大悲の海に入りぬれば唯南無阿彌陀佛といたゞく一つである、一切の善惡は如來の惠の前には融けて仕舞ふのである、一切善惡凡夫人といひ、憐愍善惡凡夫人といふのが是である。

○善といひ惡といふも畢竟凡夫である、抑々善惡を簡ばずといふことは特に善導大師の一切善惡凡夫得生者莫不皆乘阿彌陀佛大願業力爲增上緣也といふが源である、されど親鸞聖人の敎はたしかに聖德太子によりて人生的に導かれてある、善導法然の敎が聖德太子によりて人生上に生かされてあ

る、十七憲法第十條の彼是なるときは我非なり、我是なるときは彼非なり、我必しも聖にあらず人必しも愚にあらず共に是れ凡夫耳とある、是即ち一切善惡凡夫の意味である、善惡ともに畢竟凡夫たるに過ぎぬのである。

○如來の本願は本爲凡夫、兼爲聖人であるゆへに此の如く善惡凡夫といはるゝ所以である、然れども聖人と雖決して其聖人の悟が一分一厘間に合はぬ、願力成就の報土には、自力の心行いたらねば、大小聖人みなながら、如來の弘誓に乘ずるなり、たとへば陛下の御恩をいたゞくには私有財産が如何に多からんともそは何の爲にもならぬのである、金は金でも性質が異ふのである、恩賜をいたゞくときは何人も一點自分の貧富は問に合はぬのである、絶對の信仰は一南無阿彌陀佛である、たとひ彌勒菩薩と雖一點自分の効を認めぬのである。

○像法のときの智人も、自力の諸敎をさしおきて、時機相應の法なれば、念佛門にぞいりたまふ、龍樹菩薩天親菩薩の如き像法のときの智人と雖、其自力が間に合はぬのである、其自力のこゝろをひるがへすのである、善人なほもて往生をとゞ況んや惡人おやといふときは、我等は況んや惡人をやの方へ力をいれて、善人なほもて往生をとゞの方を顧みることが少い、善人が善人として往生をとゞるのではない、自力作善のひとは、ひとへに他力をたのむこゝろかけたるあいだ、彌陀の本願にあらず、しかれども自力のこゝろをひるがへして他力をたのみたてまつれば眞實報土の往生をとゞるなりとある。

○龍樹菩薩と雖、易行道の菩薩を指して停弱怯劣と名づけてある、天親菩薩の一心は、煩惱成就のわれらが、他力の信である、彌勒菩薩と雖、展轉五道憂爲勒苦と言はるゝ所以である、既に一點も自力の非なることを悟りて、之を廻へしたる已上は、結局我等と何の異る所もなく唯念佛の一つである。

○執持鈔に、往生ほどの一大事凡夫のはからふべきにあらず、ひとすぢに如來にまかせたてまつるべし、すべて凡夫にかぎらず、補處の彌勒をはじめとして、佛智の不思議をはからふべきにあらず、まして凡夫の淺智をや、かへす〳〵も如來の御ちかひにまかせたてまつるべきなり、とある、彌勒菩薩と雖我等と同じく佛智不思議をはからふことは出來ぬ、唯佛智不思議を信ずるの一道あるばかりである、其佛智不思議を信ずることになれば全く我等と同樣である、佛智不思議の誓願を、聖德皇のめぐみにて、正定聚に歸入して、補處の彌勒のごとくなり。

○龍樹の初歡喜地の菩薩といふことも畢竟如來の大悲をいたゞきたる心多歡喜のことゝなる、聖人は爾者獲〻眞實〻行信一者心多〻歡喜一故、是名〻歡喜地一景喩〻初果一者、初果聖者尚睡眠懶墮不レ至〻二十九有一、何況十方群生海歸〻命斯行信一者攝取不レ捨、故名〻阿彌陀佛一、是曰〻他力一と仰せられた、是實に善人なほもて往生をとぐの意味である、初果の聖者も尚自力をひるがへして眞實の行信に歸したまふときは攝取さるゝのである、何に況んや十方群生海の我等歸命の一念攝取してすてたまはぬのである、一念歸命のとき初果の聖者すらなほ佛はすてたまはず、況んや十方群生海の苦しめるものをすてたまふことあるべき、是實に他力の眞意義である、而して是亦唯觀念佛衆生、攝取不捨の意味である。

○此の如く如何なる聖者と雖畢竟念佛の一道に歸入するの外ないのである、凡聖道誘齋廻入、如衆水入海一味である、大小聖人重輕惡人、皆同齊應下歸二選擇大寶海一念佛成佛上と仰せられてある、聖道自力の敎は啻に我等が行ふあたはざるばかりではない、亦實に此等の衆生に對して與へられたる權假の敎たるに過ぎないのである、人生眞實の敎としては唯南無阿彌陀佛の一道あるのみである、如何なる聖者も如何なる善人も皆心を廻へして唯南無阿彌陀佛と歸命し奉るべきである、聖道權假の方便に、衆生ひさしくとゞまりて、諸有に流轉の身とゞなる、悲願の一乘歸命せよ、三世十方唯南無阿彌陀佛の一法あるのみである。

○三世十方の諸佛と雖皆此南無阿彌陀佛を說くべく現はれたまひたのである、行卷には猶如〻大地一三世十方一切如來出生ス故と仰せらるゝ、略文類には、三世諸如來出世正本意、唯說〻阿彌陀不可思議願一と仰せられてある、極言せば佛法は南無阿彌陀佛の外ないのである、一切經は南無阿彌陀佛を說かれたに外ならぬのである。

○涅槃經の一道も南無阿彌陀佛である、華嚴經の無碍道も南無阿彌陀佛である、如來と言へば即ち盡十方無碍光如來である、十方三世の無量慧、おなじく一如に乘じてゞ、二智圓滿道平等、攝化隨緣不思議なり、彌陀の淨土に歸しぬれば、すなはち諸佛に歸するなり、一心をもて一佛を、ほむるは無碍人をほむるなり、信心歡喜慶所聞、乃豎一念至心者、南無不可思議光佛、頭面に禮したてまつれ、結局は盡十方無碍光如來である。

○其如來を知るといふは、如來は是實相身なり、爲物身なり

と知るといふことである、一如法海のみやこより法藏菩薩となのらせたまひて我等をすくひたまはんとて本願一實の道をしめしたまひたのである、大小の聖人、重輕の惡人、十方の衆生を救ひたまはんとて唯南無阿彌陀佛の大行を與へたまひたのである、親鸞におきてはたゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしとよきひとのおほせをかうふりて信ずるほかに別の仔細なきなり、是如來を知りたのである、如來を信知したのである、如來に如實修行相應したのである。

○相應といふは曇鸞大師は函蓋相稱するが如しと仰せられてある、如來は持戒持律も得道の法にあらず、坐禪觀念も成佛の法にあらず、十方の衆生唯念佛一法のみを以て救濟せんと誓ひたまふ、法照禪師の釋を聖人訓讀してのたまはく、禪律如何ぞ是れ正法ならむ、念佛三昧是眞宗なり、性を見、心を了るは便ち是佛なり、如何んが道理相應せざらんと、禪律如何ぞ是正法ならむとは如何にも思ひ切つたる訓點である、念佛成佛是眞宗である。

○歎異鈔に、おほよそ煩惱惡業を斷じつくしてのち本願を信ぜんのみぞ願にほこるおもひもなくてよかるべきに、煩惱を斷じなば、すなはち佛なり、佛のためには五劫思惟の願その詮なくやましまさん、實に能發一念喜愛心、不斷煩惱得涅槃が眞宗の眞義である、否聖人の自督である、聖人のつねのおほせには、阿彌陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずればひとへに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ、是五劫思惟の如來本願を如實にいたゞきたまひたのである、如實修行相應したまひたのである、如何が道理相應せざらんと仰せられたのが是である、見性了心など出來ると思ふて居るのは、如來の五劫思惟の御苦勞を空しくするものである、如來の本願を徒然となし如來の力を徒設にするものである、勿體なきの極みである。

○佛かねてしろしめして煩惱具足の凡夫とおほせられたることとなれば、他力の悲願はかくのごときのわれらがためなりけりとしられていよ〳〵たのもしくおぼゆるなり、とあるが實に函蓋相應である、一粒の米をもいたゞくは道德のためではない、勿體ないからである、煩惱惡業のものをたすけんとの御慈悲に對して、我身が善をなすとが出來ると思ふは實に如來を空しくするものである、夫も實に善くすることが出來るなればよけれども全く不可能のことである、其不可能の身であるながら可能と思ふて居るが自力作善である、夫故聖人は濁

世の道俗善く己が能を思量せよと仰せられるのである。

○罪惡觀といふ言は自己の價値已下に自己を價することのやうに思ふのは大なる誤である、眞に我等は凡愚底下である、底下でありながら、まだ價値あるものゝ如く考へつゝあるが根本的に誤である、我等凡愚底下のものをあはれみたまひて御苦勞下されたのが五刼思惟の本願である、其御苦勞をいたゞくのが如來修行である、豳蓋相應である、眞に罪惡の自覺である、機の深信である。

○そのゆへは自餘の行をはげみて佛になるべかりける身が念佛をまうして地獄にもおちてさふらはゞこそすかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ、いづれの行もおよびがたき身なれば地獄は一定すみかぞかし、是實に選擇願心をいたゞかれたる聖人の本願相應の德である。

○之れを要するに如來は何ぞやといふは、我等が如き罪惡深重のものを飽までみすてたまはぬといふ大慈大悲にてまします、我等は善も役にたゝず、惡も致方なし、かくの如き我等を唯たすけんとの仰が南無阿彌陀佛にてましまし、之を行するばかりである、之を信ずるばかりである、念佛は淨土にむまるゝ業か、地獄におつる業か、さらに存ぜず、よしんば法然上人に欺かれたりとて更に後悔はないのである、何んとなれば我等が如き何れの行も及びがたきものに、何れの行も及びがたきものを見すてたまはぬ大慈大悲にてましませば、私一人がためなりけり、此如來ましまさずば必定地獄におつべかりける我等なり、是が如實修行である、名義相應である、南無阿彌陀佛を南無阿彌陀佛といたゞきたのである。

講義

『教行信證』信卷（菩提心釋より）

（第三回夏季求道會）

近角常觀

第五席　願成就釋

一　願成就文

顯淨土眞實信文類三末

愚禿釋親鸞集

夫按眞實信樂、信樂有一念。一念者斯顯信樂開發時剋之極促。彰廣大難思慶心也。是以大經言、諸有衆生聞其名號、信心歡喜乃至一念至心廻向願生彼國即得往生住不退轉。又言他方佛國所有衆生聞無量壽如來名號能發一念淨信歡喜愛樂。又言其佛本願力聞名欲往生。又言聞佛聖德名、

今席の處は敎行信證中、殊に大切なる信卷願成就の文と申し、阿彌陀佛の本願成就をお知らせ下さる御文であります。

『改邪鈔』の御敎化にのたまはく、――此の『改邪鈔』なる聖敎は親鸞聖人の仰せをば如信上人が口傳を受け、其の如信上人が受けられたるをば覺如上人が頂きて、物したまひたる聖敎である。

しかるに吾大師聖人このゆへをもて、他力の安心をさきとしましまします。それについて三經の安心あり。そのなかに大經をもて眞實とせらる。大經のなかには第十八願をもて本とす。十八の願にとりては、また願成就をもて至極とす。信心歡喜乃至一念をもて他力の安心とおぼしめさるゝゆへなり。この一念を他力より發得しぬるのちは、生死の苦海をうしろになして、涅槃の彼岸にいたりぬる條勿論なり。云々。

其の中に外の事も澤山仰せられてあるが、斯ういふ御文言がある。即ち淨土眞宗の敎への趣きは、『大經』『觀經』『阿彌陀經』の三經の中に現はれてあるのであるが、中にも殊に『大經』を以て眞實とする。其の『大經』にありては即ち第十八願が根本、其の十八願に取りては、『また願成就をもて至極とす』で、彌々願成就して私共が助かる處を以て宗の至極として下さるとである。即ち三經中にありても最も肝腎は『大經』、中でも骨目は第十八願、其の十八願に於ても彌々其の願成就を示されたる願成就の文が至極である、といふ其の願我就の御釋であります。

二　十八願は連絡の願

そこで其の肝腎の願成就といふ、先づ『大經』四十八願中に於て第十八願は何かといふに、私共此の罪深く仕て見やうなき者を、飽く迄廣大のお慈悲を以て見捨て給はぬといふ、其の大悲の親心のあり丈けをお示し下されたものが第十八願である。も少し叮嚀に申しますと、抑々此のお慈悲の上に於て、一番肝腎は、私共の此の罪深き心と、之をお見捨てなき廣大の思召と、彌々其の思召が私共の上に屆いて下さる、といふ其處が最も肝腎な處である。之は廣く言ふと、有りと有る凡ての宗敎の要は、廣大なる絶對の惠みの境界と、我々人生の迷ひの境界との間に連絡がつきて、彌々罪深き私共が廣大の惠みに救はれ助かるといふ、そこが一番大切な點である。そこで第一席でも申したことでありますが、今此の淨土眞宗、他力の敎へは何ういふ敎へであるか。全體他力でいふ佛とは何かと言ひますに、斯く罪深く淺間しき私共に對し、之を救はんと飽く迄捨てざる遣る瀨無き心を持ちて、其のあなたの眞實を私共に屆ける爲めに現はれて下されたが佛である。即ち此の仕て見やうなき御同樣の爲めに、廣く功德の法藏を開き其者を救ひ遣るとの廣大の願を建て、如何にもして其の廣大の眞實を屆けずには措かぬとの大悲の心を以て、私共に向はさせられあるのが、他力の佛にてましますのである。て他力に於ては、佛とは何か、佛の意義、味ひは如何と言ふに、もう外のことは無い、斯く淺間しく罪深き私に對し、之を飽く迄哀れみ、飽く迄其の者の爲めに最後の親となり、飽く迄其者を見捨てざる心を以て向はせられる、夫れが佛のお心とより外に、言ひやうは無いのである。而して之を聞かさるゝ爲めに、人生によるべなき私共が初めて安心を得る、此の外に他力の

至極は無いのであります。處て斯くの如き廣大の佛のお心であるが、今四十八願中殊に第十八願が何故夫れ程肝要であるのであるか。衆生往生の願と申して、其の廣大の佛の境界と我々迷ひの凡夫との間に、彌々連絡をつけて下さるが第十八願であるのである。で四十八願皆な一々遺る瀬無き親心、——譬へば親が小供の爲に財産を遺し、教育を施し、其外寒暑につけ夫れ〴〵の着物を與へ、色々仕て下される其の親の御心配の數々は、實に澤山なことでありて、それが即ち四十八願である。而してそれが一々皆な何うかして衆生の苦を拔き樂を與へ度いとの廣大の親心の外無いのであるが、彌々今私共が其の親の廣大の思召を一度に頂けるのは何處であるか。恰も有難いと一念親の親心を頂くと、親が長々の養育の高恩を一遍に頂くことが出來る如く、其の根本の夫れ程迄に私を哀れみ思召して下さる、その肝腎の親心一つを私共に屆けて下さると、夫れによりて其の一念に凡てを皆な頂くことが出來るのである。而して今十八願は、其の我が親心一つを屆けて、飽く迄衆生を助け取らんとの廣大の御本願にて、即ち彌々私共と佛との間の連絡をつけて下さるが此の第十八願であるのである。即ち十八願は、一口に言ふと、連絡の願である。故に十八願は實に宗教中の宗教、佛教中の佛教、親心中の親心であつて、實に絶對大悲の佛陀の境界と、我々迷ひの人間との間の連絡をつけて下さるのが、此の第十八願であるのである。故に私共此の十八願の遺る瀬無き親心のまします有りて、初めて人生の夜があけ安心をさせて貰ふことが出來るのである。それ故法然聖人は、此の願を選擇本願念佛の願と稱へて、ひたすらにお喜びあらせられた。これ實に日本に於て他力の教への興つて下された根源であつたのであります。

三　佛教と他教との根本的相違點

話が小かくなるけれとも、言ひかけた序に、今少し進めて申さうと思ひます。初日以來一日々々と當求道會も進み、四方有縁の同朋が、平日御來聽下さる方のみでなく、平日お出かけ下さらぬ方も澤山お出て下さることである。斯く東京を中心として、廣く多くの方々と結縁をさせて頂くは、深く有難く喜ばせて頂く處であります。で中にはまだ私の話を聞きなれてお出下さらぬ方もある。平日私なり、又は他で眞宗の話を聞きなれてお出での方には、十八願と申しても分りがよけれども、中には初めての方にはお分りなりにくい方があるかも知れぬ。夫等の方の爲に彌陀の本願、第十八願の味ひにつき、今少し申したらよからうと思ふのであります。話が甚だ根本的に亘るのであるけれども、全體佛教と他の宗教との間に大に區別すべき處がある。今日多くの人が普通先づ宗教なり哲學なりに心を向ける其の初めは、先づ天地なり宇宙なり乃至人間なるものを本位として、夫れが抑々如何なるものであるか、夫れをば如何に考ふ可きものであるかといふ事が大抵の場合に出立點になりて居るのである。處が之を根底として考へて行つた宗教なる時は、設ひ其上に於て如何に神と謂ひ絶對と稱しやうが、今佛教で言ふ處の佛なる味ひとは、全く種類が別なのであります。今私共佛教の上より言う時は、設ひ此の天地が如何に美しくあり、此の世界が如何に巧である

て有らうが、畢竟するに此の天地世界宇宙人間といふものは今現在私共が斯く日々惱ましく淺間しき生を送つて居る、其の苦しき人生の有樣といふことに外ならぬのである。故に佛教にありては他の宗教の如く、此の天地人生をば直ぐ意味づける分子は一分一厘あること無い。此の天地人生は何處迄も不合理の人生であり、不完全の人生である。而して其の人生に惱み苦む、即ち生死流轉の私であるといふ外、何等の意義も、味ひもあること無いのである。而して其の私が如何にして此の苦境を解脱して安心を得らるゝかといふ、之が實に佛教の佛教たる處であるのである。而して此の諸の煩惱に蔽はれ苦しめる私共に向ひ、其の惱み、苦みより解脱したる眞の佛境界より、其の者を哀はれみ、其の者を救はんために遺る瀬無き心で現はれ出で下されたが、實に大悲の阿彌陀佛にてまします。故に此の世界にせよ、私共の身體、生活にせよ、此の佛のお光りで救はれ、廣大の惠みで助けらるゝで無ければ、如何にするも人生安心のあること無いのである。而して其の救はんとの廣大の思召が佛の本願であり、其の大悲の親樣が阿彌陀佛でましますのである。故に此の人生迷ひの境界の上に、此の思ひがけなき救ひの阿彌陀佛、本願のまします あり、佛教の眞の教へといふことは、此の佛の此のお惠みを頂け、とあるが佛の眞の仰せ、眞宗の教旨となるのである。故に佛教に於ては、廣く私共自分々々が悟りて佛に成ることであると言うても宜しきも、寧ろ眞の佛教の味ひは、斯くの如く此の苦しみ迷ひの私共の上に、眞に廣大の惠みを以て飽く迄救ひ解脱せしめずば措かぬとの遺る瀬無き思召を以つて哀はれみ待ち兼ねさせ給ふ親樣がまし〳〵て、其の彌々廣大の御哀れみの有り切りをば、私共に手渡して下さる處の願が此の第十八願となるのである。故に十八願は他力淨土門に於て最も肝腎の願である。中にも此の十八願成就の文を以て至極とするといふことは、其の廣大の本願をお建て下されて、其の願彌々成就して、今人生に在る私共が其の廣大のお心を聞いて信ずる一念に、其の廣大の思召が私共の心中に屆いて下され、往生することを得ることが、彌々成就して今現に私共の上に開顯して來たのが、此の本願成就の文であるのである。即ち彌々其のことが成就して人生實際の上に現はれ出て下さる處が此の成就の文となるのである。其の肝腎の願成就が、それが今席の處から、出て來るとなつたのであります。

四　本願三心の意義

そこで大體を言うに、此の『教行信證』信卷上卷の方は、この第十八願の方を御示し下されたもの、又今席よりの下卷は、願成就を書いたものと見てよいのであります。夫れは即ち上卷に於ては御承知の如く、初めに、

至心信樂の本願の文、大經に言はく、設ひ我佛を得たらんに、十方の衆生至心信樂して、我國に生れんと欲うて乃至十念せん。若し生れずは正覺を取らじ。唯五逆と誹謗正法

とをば除くと。

斯く第十八願の文をば初めから擧げさせられ、それは即ち一昨夏來お話した通りであるのである。即ち斯くいふ十八願は佛が斯く十方衆生に向はせられ、十方の衆生が其の廣大の眞

實を頂いて、至心のまことを致し、信樂して佛の國に生れんと願ふて乃至十念せん者は、若し生れずば正覺を取らぬとある此の佛の御誓ひが、十八願であるのである。而して之につきては、一昨年より、本講前席菩提心釋に至る迄の話が皆な夫れなのであります。が、中にも殊に其の中心として、前年來雜誌にも連載したは。至心信樂欲生の三心と申して、私共の方に於ては至心のまことも生ずることなければ、信樂の喜びも出る事なく、欲生の淨土に參り度い思ひも私共の方には有ること無い。爾るに佛の方より其のまことなき私に飽く迄まことに仕て下さるが佛の至心であり、信樂は又其の一寸一分も手前の方よりは信じて出られぬ私に、飽く迄佛の方より廣大の信を以て臨んで下さるが佛の信樂であるのである。又欲生は其の參り度い思ひの無い私に、佛の方より飽く迄我國に生れんと欲へと言うて下さるが佛の欲生と、斯く何處迄も遣る瀬無き本願の親心である爲めに、遂に其の思召が私共の心に貫徹して初めて其の三心の信心が私共の心に頂けるとなつて來るのである。故に至心信樂欲生の三心と申しても、要するに、佛の方より其の廣大の三心で向うて下さるやるせなき御眞實である爲めに、遂に夫れが私の心に貫徹して始めて頂けるとなるのであつて、即ち前席でいふ友人が色々と、此のお慈悲を知らせやうと種々になし呉れる親切である爲めに、遂に此方が頭が下りて「あゝ有難い」となる如く、夫れ故此の十八願の三心は、私の方より自力で佛に向ふ三心であるのでは無い。佛の方より飽く迄不淸淨不眞實の私に、飽く迄眞實淸淨の見捨てざるまことを以て向ふて下さるが、實に本願の三心の根源であるのである。故に本講前席までの菩提心についても、淨土の菩提心は上求菩提下化衆生と、我々の方より佛に向ふ菩提心であるのではない。佛の其の廣大のお心をきゝあゝ有難いと佛に振り向つた一念が淨土の大菩提心であるのである。斯く何もかも、佛の思召一つより頂くのであるといふ、その本願の親心一つをお知らせ下されたが、前席迄の上卷の御敎化である。而して今席よりの下卷は、其の思召が彌々私の心に屆いて下さる處が此の願成就文であつて、即ち肝腎の開發の一念の味ひであるのである。言ひ換へれば私の心中に、彌々廣大の佛心が開顯して下さる有樣が、此の願成就の文となるのである。夫れ故他力淨土門に於ては、最も肝腎の願成就文である。それ故僅に一句の御文なれども、淨土他力に於ては何程言ひても〳〵言ひ盡されぬ味ひのある處である。私など始終の話が常に此のことばかりを話さして貰ふて居るのであるけれども、彌々之よりは『信卷』直き〳〵に其の本文につき、一念の處をば話させて頂く段取りとなり、殊に有難く思はせて頂く次第であるのである。以下本文に就き、段々お話しすることゝ致します。

五　惡いまゝでもなく、善くするのでも無い

『夫れ眞實の信樂を按ずるに、信樂に一念あり。』

『眞實の信樂を按ずるに』は、即ち以上の『信卷』上卷全體をば受けて仰せられたお言葉であるのである。上卷全體のお示しは、即ち今言ふ至心信樂欲生の三心のお知らせに外ない、が

其三心も結局は眞實の信樂の一つに納つて仕舞ふのである。それは即ち前年度講義に於て詳しく申述た通りであります。而して其眞實の信樂は何かといふに、私の方からする眞實では無くして、私の方は何處迄も不實の塊である。爾るに其の不實を飽く迄哀はれみ、飽く迄見捨てられぬとある佛の眞實にてましますのである。――昨夜も談話會にて茲の處を大騷ぎして話したことであつたのでありますが、茲が甚だ大切な處なのであります。何うかと言ふに動もすると皆んなが茲の處を斯ういふことに取つてしまつて困るのである。夫れは「私の方は斯く不まことであるが、佛は其の不まことの私に何處迄もまことにして下さるが佛の御眞實である」と、茲を唯夫れ丈けの事に輕く取つて仕まつて居ると、私の不まことは不まことの儘で何時迄も惡しく殘ることになり、「自分の機樣の惡いのは性分故何うしても止まぬが、其の止まらぬ者に向ふがどこ迄もよくして下さるのである」と、唯こういふ事になつて仕まつて、何時迄も佛の御まことゝ私の惡しさとが出違ひになり、何うしても本當の處が頂けぬ、となるのである。俗な譬ではあるけれども親子の間に於て、子供が親に不孝し親の御恩を喜ばず、親に申譯けのない事ばかりをやつて居る。して、子供が言ふには、「自分は斯く申譯けの無い道樂ばかりをやつて居るが、併し親は斯ういふ者を愛し、斯ういふ者を飽く迄見捨てずによくして下さるが親の惠みの有り難い處である」と、斯く自分の惡い處、申譯けの無い處をば、何時迄も親の御慈悲と別れ〳〵にのこして置いて、唯横着に佛のお慈悲を取扱つて居る、此の種の信仰が甚だ多いのであります。そんな横着は仕て居ぬと皆なが思ふて居らるゝのであるけれども、結局「凡夫故人間は惡が止まぬ」と、自分で然う決め込んで居る信仰であると、放蕩息子が道樂は仕て居ながら、「斯ういふ者でも捨てぬのが親ぢや〳〵」と言うて居ると、同じになつて仕舞ふのである。夫れ故夫れでは不可ぬといふと、今度は反對に、「如何に惡をお見捨て無いお慈悲にましませばとて、此の上惡を致しては宜しく無い。お慈悲を聞かして貰うた上は、銘々内に省みて、成る程惡は自性てはあるけども出來る丈けは心得な不可ぬ」となつて來る。之が又甚だ宜しく無いのである。我々心得て自分の惡が聊かでも止む程なら、佛の廣大のお惠みを要しはせぬのである。すると私共人間は、最早や此の二つを外にして、取るべき道が無いやうに考へられる。處が此のお慈悲の道は、其のどちらでも無いのである。

六　一念の味ひ

今度の『求道』(第十卷第五號)に「入信の栞」なる一文がある。あれが中々よく書いてあつて、夫れにも此の事が言はれてある。夫れには、「惡い事は仕てならぬ、出來る丈け善いことを爲せ」といふ敎へはまことに道德的であつて、非常に結構な敎である。故に我々夫れで行かれゝばよいのであるけれども、實際には夫れでゆかれぬから困るのである。又「出來ぬてもよい」といふ敎へは、一見甚だらくなやうではあるけれども之では何うしても本心にすまぬ處があつて、滿足されぬから困るといふことが書いてある。すると私共、常に此の兩者のどちらかに往來して居つて、何うしても本當の安心に出ら

れぬは何故であるか。眞に佛の眞實といふ處が、はつきり頂けて居ぬからであります。皆んなが大抵何う取つて居るかといふに「私は不實であるも、佛は飽く迄眞實の方である」といふ。然う言うて居る心は、「自分は虛言をつき、人に親切心の無い薄情者である、けれども向ふは虛言をいはぬ人、飽く迄親切に仕て下さる人」といふ丈けに止まつて、此方の薄情と向ふの親切とが、全く出違ひになつてある。抑々佛の親切なるもの、眞實なるものは、其の私の不實薄情を離れて外に無いのであります。世の中に眞の親切といふものは、唯一應善く仕て呉れるといふ丈けならば、眞の親切とは言はぬ。眞の親切は、向ふが何程よくしてくれても、此方が一々皆な仇にとり、刃向ひし、不實に受け、逆々にでる。それなればとて、親切にする者の方が、あれでは仕やうが無いと見捨て、相手にせぬならば、本當の親切では無い。眞の親切は、斯く此方が不實にとればとる程、「其の不實にとる處が可哀相である」刃向ひすればする程、「其の刃向ふ處が哀はれ」と、益々其者に變らぬまことを以て、向うて呉れるが眞の親切であるのである。即ち眞實とは、其の變はらぬまことを以て、飽く迄やり通して下さる人のことであるのである。處が斯く一方は、飽く迄變はらぬ親切で、彌々善く仕てくれるに係はらず不實の奴は、「あの人があのやうに親切に言ふは、あれは表向きぢや」と、飽く迄疑ひに疑ひ拔いて居る。けれども片方は、此方が然ういへはいふ程、彌々そこを遣る瀬なく心配してくれるとなる。するとサア其の一方の親切が、彌々片方の不實の胸中に屆くは何處であるか。向ふは、かく此方がそこ迄疑ひ、仇にとり、足下に蹈みにぢつて居るに對し、益々その然うする處が哀はれて、捨てられぬと、彌々涙を以て向うて下さる眞實であるのである。處で其の廣大の向ふの眞實と、私共の不實とが、唯そうある有樣が直ぐ信仰となるのでは無い。自分は惡いこと仕てるけれども、向ふがそれ迄に思ふて下さるから難有い」といふのでは、一念の味ひは無いことになる。處が斯く此方は疑ひ隔てゝ、色々に言ふてるに係はらず、夫れを御覽になる大悲のお慈悲の方は、一應二應でない。そのそんなこと言うて居る、それが可哀相で捨て置けぬとの、廣大の御親切である爲に、其上々々と彌々お慈悲を加へて下さる。して此方が言ふことを聞かねば、其の聞けぬ處が益々哀はれだと言はれ、疑へば疑ふ處が益々不憐と、飽く迄〳〵深きお慈悲である爲に、遂に如何な不實の奴も、最早や脫れて見やうがなくなり、「さては斯る私に、よくも〳〵そんなに迄思召し下さる御眞實でましたのであるか」と、初めて其の廣大の御親切に頭の下つた一念が、之が一念の味ひであるのである。之でなくては、一念の味ひはないのであります。

七　辨圓が悔悟の一念

そこで今迄聞いてお出になる方には、よく氣をつけて頂き度い。道樂者が、自分は道樂を平氣で續けながら「こんな道樂者を捨てゝ下さらぬのは親丈けぢや」といふてる喜びに止まつて居る方は、あらせぬかといふのである。本當に頂いた味ひは然うでは無い。今迄其の道樂をなし、親泣かせばかり仕て居る徒ら者が、斯く親がそれ迄に身を捨てゝ思召し下さ

る、其の親心を言ひきかされきかされて、彌々最後に「親はそんなに迄自分の爲め御心配下されてあつたのであるか、長い間御心配かけて、實に〳〵畏入りました、長い間横着を仕拔きました」と、初めて其の親の眞實に目が醒めて、長の不孝が折れた處が一念の味ひであるのである。て丁度茲は彼の剛情我慢の辨圓が、聖人を害しやうと思つて、板敷山にて其の時節を待つて居る。それにも係はらず聖人が、いつも南無阿彌陀佛々々々と念佛稱え〳〵、其のあたりを往邊して下さる、聖人のお心であります。辨圓の方は聖人を殺さうとたくらんで居るのであるけれども、聖人の方には其の刃向ふ辨圓が哀れで、之にお慈悲を知らせてやり度いと、何程辨圓が刃向ふても、聖人の方は此の御見捨てなき思召である。故に何程殺さうと思うても、遂に殺すこと出來なかつたは、辨圓の方は敵視して居つても、聖人の方に敵とせぬ思召がましますからである。故に辨圓度々時節を待つと雖、更に目的を遂ることが出來ない。「之は不思議ぢや、をかしい」と

……頗る奇特の思ひあり、仍て聖人に謁せんとおもふこゝろつきて、禪室に行きて尋申すに、聖人左右なくいであひたまひけり。すなはち尊顏にむかひたてまつるに、害心たちまち消滅して、あまつさへ後悔の涙禁じがたし。云云。（御傳鈔）

自分の方は之れ程惡い、恐ろしい考えで向つて居るに係らず、これを憎まず、斯く迄何氣なき樣にて出て遇ひ下さる思召である。此の思召に面の當り接して見れば、今迄夫れ程遣る瀬無き思召にて自分に向つてゝ下された方を、長らく仇と考え彼れ斯れ敵視して居つた自分の方が今更實に相すまぬとなる。即ち「害心忽ち消滅して、剩へ後悔の涙禁じがたし」となる。一念は即ち茲なのであります。

そこで其の辨圓が、斯く聖人を飽く迄向ふに廻はし、恨み刃向つて居た不實といふが、外ぢや無い。現に私共が、「そんな佛などゝいふものは無いだらう」と、お悲慈を淺いことに考え、佛を無視して居る根性が、即ちそれなのである。又「自分如きつまらぬ者は、生きて居つたて生き甲斐が無い、自殺でもすべきである」などと、そんなこと言ふて居るのが現に親の心配に逆らひ、仇にしてるといふものなのである。又前席でも言ふ如く、中には初めから「惡うムいます」と、頭ばかり下げてしまつて、自分に於ては一角分つた氣で、其の實折角向ふから言うて下さる御心配を充分きかず、無にして居る、といふ人もある。現に此間も或方が、廿四輩廻りすると、お訪ね下された。「廻はられるはまことに結構であるも、貴方肝心の御信心の方はどうか。そんなことせらるゝよりも、丁度よき折故とゞまつて求道會でも聞いてゆかれたら何うか」と申上げたに係はらず、其の方は「御親切はよく分つて居るが殘念ながら行く」とて行つてしまはれた。口では皆んな頭を下げて有難い〳〵と言つてるけれども、眞實下るといふとこが實に六かしいのである。故に茲は皆さんにうつかり聞き流して貰つてはならぬ。

八　姨捨山の譬喩

先日來、度々難信々々といふ御言葉が出たのでありますが

何も淨土眞宗で難信々々と仰せられのが外ぢや無い。近年信仰問題が著しく起つて來て、青年の方が新らしく『歎異鈔』を喜ばれるのも實に結構である。又東京に於ける舊信仰の方々も聞きやうが數年前より、著しく引き立つて來た。斯く大に引き立つて、新舊共にお慈悲に力を入れられるは誠に有難いことであるのである。けれども遠慮なく申すに前席の『樂邦文類』の

淨土を修する者常に多けれとも、其の門を得て徑に造る者幾も無し。淨土を論ずる者常に多けれども、其の要を得て直に指る者或は寡し。

の仰せ通りで、眞に道る瀬無きお慈悲に、眞に夜が明けた方は新舊共に至つて少いと言はなければならぬのである。勿論信仰に新舊の別がある可き筈は無い。唯便利上年寄りと青年によつて名をつけた迄に過ぎないのではありますけれども、大體に言ふに先づ年寄りの側は、「今の若い者は此の世のことばかり言うて不可ぬ」といふて居られるのであり、又青年の方は、「昔の人は人生問題を言はぬから不可ぬ」と言ふて居られるのである。私より言ふ時は共に何の變りもない。新も舊も共に眞にお慈悲が徹すれば其に同じことになつて仕舞ふのである。けれども眞の處が頂けぬもの故、年寄の人の方は自分の惡い處の方はそつちのけにして、「惡くても往生々々」と言ふてるのであるから不可ぬし、又若い人の方は、「こんなに惡くては〳〵」とばかしなつて、何時迄も自分の罪惡の根底を自覺せぬのだから、宜しく無い。すれば老いたるも若きも肝腎は唯信樂開發の一念となる。茲になると平日言ふ話なれど、私は、も一度繰反し度い。常に言ふことなれど、も一度是非聞いて頂き度いのであります。

それは、例の私の姥捨山の話である。私が九歳の時、書き法談として、暗誦して說敎するやうに、父から敎はつた話である。之が實に有難いので、私が何度繰反して見ても、信仰の味ひはもう此の以上に出ないのである。定めし最早や御承知のことゝは思ひまするも、例の不孝な小供が、老いたる親を籠に入れ、奥山に捨てに行つたといふ話であります。此間も或方の處へ參つて之を話し、之を單に昔然ういふ不孝な親捨てがあつたといふ昔話に聞いてはならぬ、昔で無い、今も皆んなが此の親捨てを仕てると申したら、先方が事情上大に困まられたことがあつた。現に人ごとで無い。斯くいふ私の父如き一代私の爲めに非常な苦勞をして下された。私の父は、六十年の長い間、寺の住職を勤めて下された。夫れは幼にして親に別れて自分の代と、其上年老いてからは私に代りて、私の一代迄もやつて下されたのである。斯く私は全く親を一代使ひ潰して、とうど死なしてしまつた譯けにて、即ち奥山に捨てゝしまつたも同然である。猶ほ其の上遺つて居られる母に對しては、現に故郷に一人捨てゝ置いて、申譯なき不孝をして居る。それなら私が即今懺悔して、直ぐ東京を引き拂らひ、國に歸つて母に事へるかといふに、然うはせぬ。何ういふ根性で居るかといふに、「自分とて親不孝は仕度くはなけれども、法の爲め斯く出て居るのであるから、親も不滿足とはして下さるまい」と。結局自分の親不孝の上へ、親のお慈悲を持つて來て、一種のエキスキユーズをやつて居るのである。

之は皆さんも必ずさうだらうと思ふ。人間は殺生、爭ひ、五分々々、もとより惡いには違はぬも、併し然うせねば人間は成立たぬのだから仕やうが無いと、ちやん先きうまい理屈をつけて居る。おまけに其處へ勝手にほとけを引つ張つて來て「斯くの如き仕やうの無い者だから、其の惡しきなりで佛はお助け」と、丸て親を山に捨てに行きながら、「自分は捨てるけれども、親は遁げ隱れせず、ぢつと捨てられて下さるが親のお慈悲」といふやうの話になつて居る。之は大に注意しなければならぬ。動もすると、私共お慈悲頂いた後でも、之が出て來るのである。うつかりすると、「仕やうが無い、之をお助け」といふやうなことになつて來るのである。深く警めなければならぬのであります。

九　山陽の逸事

さて斯く小供が捨てにゆくと、親は何うするかといふに、道々籠の中から手を出して、或は木を撓め草を結びて「道しるべ」をせられる。之を見た小供は何う思ふかといふに「之はわしが捨てたら、親はあとから此の道つたつて、歸つて來る量見と見える」と、さう思ふもの故心で冷笑しながら、あとから〳〵親のせられる「道しるべ」を碎き〳〵、峠の方に進んで行つたといふのである。之は何か、私共人生上、親が一代の經驗で、色々あゝ斯うと言うて下さる。夫れを有難いと喜んで直ぐ其の通り實行するならよけれども、親の折角言うて下さることをば、「いらざるお世話だ、それは皆な昔風だ」と、いふやうにばかし考えて、親の言うて下さることをばしみ〳〵難有く頂く事をせぬ。即ち之が平日親の「道しるべ」をはたから〳〵碎いて行つてるものなのである。かくして小供は親を奥山に捨てに行つた。處で茲で先きよりいふ不徹底の信仰だと何うなるといふに、「自分は斯く惡いことばかし仕て居るのであるけれども、親は斯く親切に飽く迄言うて下され捨てゝ下されぬから有難い。」も一ついふと「自分は斯く捨てるけれども、だまつて自分のするやうになつてゝ下さるが親である。」といふやうなことになつてしまつて、然らば自分はといふに、矢張り惡は止まぬから、何處迄も親を捨てるのだといふのである。即ち一方では斯く現在捨てつゝ、一方では有難い〳〵といふのであつて、之では取つたり、置いたり、何時迄いつても切りがつかぬ。之は皆さん、氣をつけて見られたら、切りのつかぬで困つて居らるゝ信仰が、隨分多いて有らうと思ふのである。

處で私は此の親捨てのことを思ふて、此間も賴山陽の事を思ひ出したのであります。それは南條先生の常に話される話で、たしか小栗師の書物に出て居ると申すことである。賴山陽が『日本外史』を著しく、中でも名高き楠氏の卷を書き上げた時、自分でも其の出來榮えのよいのを自慢して、平素仲よしの雲華院大含師の處へ見せに行つた。大含師も之を見て、如何にもよく出來て居るとて、口を極めてほめられた。すると山陽が言ふには、「どうか君の宗派の學頭にも之を見て貰へまいか」といふので、「それでは紹介しやう」といふので、夫れから大含師につれられて共に時の學頭易行院法海師の處へ出かけて行つたといふのである。そして大含師が山陽のことを

紹介して、「之が頼久太郎と申す者であります。此の度び外史の楠氏の卷を書き上げたから、一見を願ひに出た」といふ旨を言ふと、其の時易行院は見臺に向つて本を讀んで居られたが、其の儘顔を横向けたなりで、ジロッと眼鏡越しに山陽の方を瞰まれた。少時して言はれるには、「お前が頼久太郎と言ふ者が。聞けば京阪の間を長らく流浪して居るといふ話である。聞けば藝州竹原に一人の母を遺して居るといふことである。そんな母を捨てゝ、あちこち儒生をなし、酒を飲んでぶら〳〵して居る者が、而も忠孝の楠氏の卷を書いたとてわしは感服が出來ぬ。わしはそんな不孝者の書いた、楠氏の卷など見度く無い。」と言うた切りで、又もとの通り見臺に向ひ本を讀み出されたといふのである。處が流石は山陽、言下に頭を下げ、如何にも心肝に徹したと見えて、夫れから忽ち行李を整え、鄉里に下りて母を迎へ、或は母を奉じて嵐山、吉野に遊び、一代孝養を盡したといふのである。即ち山陽晩年の詩文には夫れが多いといふのであります。即ち斯く自分が惡いと氣がつけば、直ぐ親の處へ飛んで歸つてこそ、初めて自分の惡しさが分つたとも言へるのである。處が御同やうは、「惡いことは惡いが惡いこと仕てゝも親は滿足してゝ下さるから有難いのである」「惡い者でもお助け下さるから有難い」などゝ、得手に親のお慈悲を持つて來ることばかり言うて居て、自分の惡しさの方は、更に止めやうとも考へて居ぬ。爾らば、大に改めて善くせぬならぬのかと言ふに然うでも無い。すれば何うするのか。そこが此の姨捨山の話の有難い處なのである。

一〇　親が最後の一言

何うかといふに、斯くて小供は峠に達し、彌々親捨てゝ歸らうとする時に、親は一言、「待て！」と呼び止められた。「最後に一言いふておくことがあるから、能く聞け」と言はれる。言はるゝには、「汝は我を捨てゝ行くけれども、我は更にそれを不足に思ふのぢや無い。又もとより再び歸らうとも思つて居ぬ。けれども斯く我を捨てゝゆく汝を見ると、我は汝の行く先き氣にかゝつてならぬのである。故に我は平日より汝の爲め「道しるべ」を仕て置いた。汝は我を捨てることばかりに夢中になつて居て、自分の歸り道のことを忘れて居る。故に我は夫が可哀相で道々心ばかりの「道しるべ」を仕て置いたのであるから、我は之て別れるけれども、夫を辿つて間違なく歸り、堅固てやれ」と、斯う最後に言はれたといふのである。之を言はれた時には、小供にする時は、今迄思うて居つた親心とは全く違つてあつた。今迄は、「自分は惡いことしてゝも嘿つてするやうになつてゝ下さるが親のまこと」などゝ、全く自分の惡しさで親のまことを、負かして居たものだつたのである。處が彌々最後に親の長の苦勞の眞實は、「惡いことしてゝもよい」との仰せぢや無い。惡いこと仕てゝもよい位なら何も夫れ程苦勞して助けるには及ばぬのである。處が何程言うても何うしても其の惡が止まらぬ、「其の止まらぬ處が可哀相なばかりに、其の惡いことする小供を不足に思はぬ位の段ぢや無い、其の親捨ての不孝者の爲に、何うしてもこの眞實を屆けてやらねばならぬ。若し自分の存生中に屆けることが

出來ずば、死後に於てゞも何うかして之れ一つは知らしてやらねばならぬ、」とある、有り難き親のお心であつたのである。で小供は之をきかされた一念に、「あゝそれ程心配させて居たのであつたか。今日迄は惡い〳〵とは思ふて居つたも、此の惡い根性に察しをつけて、許して下さる位に長らく思ふて居た。其の夫れ迄惡い自分の爲めに、親はそんなに迄も思ふてゝ下されたのであつたか申譯けがない」と、初めて手をついて畏入り、再び籠に入れて連れ歸り、一代孝養を致したといふのである。それで此の話には一つの歌がある。

奥山に枝折り〳〵は誰がためぞ親の身捨てゝかへる子のため。

之が私の親が敎へて呉れた話たつたのであります。で斯く親が折角の「道しるべ」を碎いて歩く、其の者を引くりかへす迄捨てぬとある親の思召ときかされてみれば、「如何にも私を夫れ程迄に心配してゝ下されたのであるか。よくも〳〵斯る不孝者を忝けなや、如何にも私が惡う厶りました」と頭の下る外は無い。『歎異鈔』に

聖人の常の仰せには、彌陀の五刼思惟の願を案ずるに、ひとへに親鸞一人がためなりけり。さればそこばくの業をもちける身にてありけるを助けんとおぼしたちける本願のかたじけなさよ。

とあるが、即ち此の頭の折れた處なのであります。で此間から言ふのであるが、青年者にする時は、「佛の存在が如何」「佛とは何か」などの問題が、折れてしまはなくちや不可ぬ。又聞き慣れてお出の人にする時は、五刼思惟が何うの、念佛の謂はれが何うのと、五刼思惟や念佛を、自分と惡しさと離して言ふてる間は、お慈悲は分つて居ぬのである。佛の眞の味ひは、「成る程是れ程惡い、罪の私を、之をよくも〳〵そんなに思召し、其の爲めに長の御苦勞でましたのであるか」と、直接自分の惡しさの上に頂けて來なくては不可ぬ。抑々佛の長の御苦勞は何か、親の頭髮の白く霜を頂くは何か、親の腰の曲つてあるは何かといふに、この罪ふかき私一人が爲めに長の御苦勞のお姿とより言ひやうは無いのである。又五刼思惟兆載永刼の御苦勞といふも、即ち斯く助るべからざる者を助ける爲めの御骨折り故、五刼も要し兆載もかゝつた譯けにて、即ち「彌陀の五刼思惟の願を案ずるに、ひとへに親鸞一人がためなりけり」――之が眞實の信樂開發の味ひであるのであります。で『信卷』序文のお示しには、

夫れ以れば、信樂を獲得することは如來選擇の願心より發起し、眞心を開闡することは、大聖矜哀の善巧より顯彰せり。

即ち廣大の信樂を獲得することは、遣る瀬無き選擇の親心より起るとのお知らせである。之を要するに、ひと度びやるせなき御眞實に直接して、今迄分つた〳〵と思ふて居つたのが、申譯けなき間違ひであつたと、初めて畏入つた處が一念の味ひであるのである。即ち「眞實の信樂を案ずるに、一念あり」と仰せらるゝのであります。

一一　一念の時剋につきて

『一念とは、斯れ信樂開發の時剋の極促を顯はし、廣大難思

の慶心を彰はすなり。』

仰せが堂々と、思ひ切つてある。私の終始の話が、一念を際立て過ぎる程にあるのであるけれども、聖人の御頂き方が斯く際立つてある。「一念とは彌々信心の開け來る、時剋の極促である」との仰せであります。處で此の文に時剋とあるもの故、即ちよく時剋の問題が起つて來て、一念に何時何日の覺えが有る無いなどの詮索が持ちあがるのである。けれども入らざることである。私など自分の頂いた上より言ふ時は、それはたしかに一念はある。それは夜が明けたと明けざるとは、大に變り目があるのであるけれども、自分として時刻を覺えて居なければならぬ、又意識し記憶して居なければならぬと取ると、大に間違ふのである。世の中に秘事法門とて、信仰にいつ迄も切りのつかぬ人に對し、人爲的の方法で、信仰に切りをつけさせる諸種の邪義がある。之れが皆なこの一念の間違ひより來た、有るまじき思ひ違ひなのであります。さりながら「いつの間にやら頂いた」などいふ言葉の下に、實は頂かずに居る人が澤山ある。「いつの間にやら頂いた」といふてる人の中には、其實頂けて居ぬ人が多いから、注意しなければならぬ。さて斯く一念に際を立てゝいふと、然らば信後は、水際立つて煩惱惡念が起らぬかといふに、それは起るのである。起るけれども、上來いふ如く今迄が中譯けなき間違ひであつたと心の根本より手の平かへした如く引くりかへり、六趣四生の因亡し果滅する處の一念である。故に一念の極促に於ては、たしかに今迄世の中を不足に思ひ、色々苦勞したは、此の廣大のお慈悲を頂かなんだからであつたと、心の根本に於てころりと變つてしまふ處があるのである。之は『歎異鈔』十六章に於ても

一向專修のひとにおいては、廻心といふこと、たゞひとたびあるべし。……

眞の廻心といふことは、一生に一度しかない。何遍も〳〵せねばならぬやうな廻心では本當にお慈悲に夜が明けた廻心とは言はれぬ。而して

……その廻心とは日ごろ本願他力眞宗をしらざるひと、彌陀の智慧をたまはりて、日ごろのこゝろにては往生かなふべからずとおもひて、もとのこゝろをひきかへて、本願をたのみまいらするをこそ、廻心とはまうしさふらへ。

今迄善きにつけ惡しきにつけ、取つたり置いたり、信仰に切りがつかぬて困つて居る處へ、今佛ありて其者を飽く迄お見捨て無き大悲の仰せなることを言ひきかされ、さては斯く迄言うて下さる御眞實であつたかと、彌陀の智慧を賜はりて、初めて今迄の衣を脱ぎ代へ其の廣大本願の親心一つに滿足させて貰うた處が、其の廻心の一念であるのである。故に一念に於ては、今迄とはかはりて、今迄如き人が何うの斯うの、自分が善いの惡いのと、人や自分相手の我が身の惡しさぢや無い。「長い間斯く迄の廣大の御親切を無視して、實に々々私が惡うムりました」と、心の底より謝り果てゝ、言はうやうなき廣大の御眞實に腹一杯滿足させて頂いた有樣が一念であるのである。で次には『廣大難思の慶心を彰はすなり』――其一念に滿足させらるゝ處のお慈悲の有樣は、文字にも言葉にも言ふに言はれぬ。或は盡十方無碍光如來と申し、南無不可思議

光如來と讃じ奉るは、皆な此の口にも心にも言ひ足らぬ喜びの言葉なのである。即ち私共は「惡うては不可ぬ、許るされぬ」と思うて居た處へ、計らんや「其のいかぬ惡が止まぬ者故、其の止まぬ者が可哀相なのである。惡ければ惡き丈け捨てられぬのである」と、此の廣大のお慈悲に出遭はせて貰うたのなれば、之を初めて知らされた時には、實に〳〵思ひがけ無い。「あゝよくも〳〵之れ程の私を、之れを見捨て給はぬお慈悲であつたとは何たる有難い思召であつたか、迚も〳〵人間の測られる處で無い。今迄惡しければ斥けられる外に道なかつた人生に、惡しきを彌々お見捨てない御眞實とは、何たる不思議の本願にてましませしぞ」と、此の言はやうなき喜びの思ひが溢れて來る。即ち初めて佛の御眞實に夜が明けた此の廣大不思議の慶び心が、一念開發の信樂であるとであります。

三　聞其名號

そこで次ぎには、彌々成就の御文である。

『是を以て大經に言はく、諸有衆生其の名號を聞きて、信心歡喜し乃至一念せん、至心に廻向したまへり。彼の國に生れんと願ずれば即ち往生を得、不退轉に住せん。』

夫れ故聖人の成就の文の讃みやうが著しい。一字一句もおろそかにしてはお出てにならぬのである。即ち一寸としたことなれども「諸有」の有の字の如き、有の字は二十五有界など申して、迷ひの有樣を言ふ言葉となる。又「其の名號」の其の字は、前に續く御文を受けたので、即ち佛のことである。即ち茲には無けれども、此の十八願成就の文は直ぐ前の十七願成就の文に續く御文なので、即ち此の前に

十方恒沙諸佛如來、皆な共に無量壽佛の威神功德不可思議なるを讃歎したまふ。

といふお言葉がある。之れはもと〳〵十七願の文に、

設ひ我佛を得んに、十方世界の無量の諸佛、悉く咨嗟して我が名を稱せずば正覺を取らじ。

といふ御誓があつて、即ち十方世界の無量の諸佛に、悉く我が名を稱え讃歎せしめて、我が慈悲を十方衆生に知らせしむるとある御誓ひである。而して其の誓ひに報ゐ現らはさせられたのが、今の「十方恒沙諸佛如來、云云」の文であつて、即ち夫れより現はれて十方有りとある佛が、皆な各其の國に於て阿彌陀佛の威神功德の不可思議なるを讃歎下さるとなる。而して其の隨一として釋尊は此の土に來現下され、我々に阿彌陀佛のお慈悲をお知らせ下された。其の釋尊のお說き下された其の佛の名號を聞いてとなるのである。斯く一字と雖も聖人が御覽になる處になると無駄がない。次ぎの「名號」は、又『和讃奥書』の御示しに、

名の字は因位のときのなを名といふ。號の字は、果位のときのなを號といふ。

即ち佛の因位果上の廣大な大悲より現はれ來た名號である。其の名號を聞いては、又『信卷』このあとの處に、

聞と言ふは、衆生佛願の生起本末を聞きて、疑心有ること無し。是を聞と曰ふ。

即ち南無阿彌陀佛の名號の「道しるべ」は、其の親捨てゝ歸る

汝の爲めにこしらへたと、此の佛願の生起本末を聞かさるゝと如何な不孝者も、如何にも思ひがけなき思召である爲めに、今更畏れ入つて今迄の不孝が申譯け無いとなる。即ち夫れが聞いたのである。すると聞くなり「信心歡喜し、乃至一念せん」。――其の計らざる廣大の眞實に接して、嬉しくて〳〵、「あゝ有難い」と乃至一念せんである。それが即ち一念の信である。處で茲で「乃至」の二字が大切である。即ち我々同士の間であると、聞いて「あゝ分つた」となればもう夫れ切りである。處が今私共佛の眞實の親心が知れたとなると、其の信は即ち金剛の信心であつて、一代喜ばせて貰ふ信である。もとより信後も惡しき心が起らぬではなけれども、其の起るにつけ益々「斯のやうの者を〳〵」と、即ち蓮如上人の『御文』には

一念をもては、往生治定の時剋とさだめて、そのときの命のぶれは自然と多念にをよぶ道理なり。

元來初めの一念といふのが、口に念佛を稱へる一念をいふのて無い。心に造る瀬無きお慈悲が徹して、「有難い」と初めて頭折れた夫れが一念なれば、其上より一念十念位ならず、一代の間南無阿彌陀佛々々々と喜ばせて頂く信心なのである。それが乃至の二字に盡されてあるのであります。

一三　即得往生

次に『至心に廻向したまへり』――元來は「至心に廻向せん」と讀む可き筈の文字なのである。けれども然うなると自力になる故、聖人は例の如く全然方角を捩かへて「至心に廻向したまへり」と、お讀みになつた。即ち一念に頂く信心は、佛の方より廣大の眞實を私の方に差向け、廻向して下される處の信心であるのである。て聖人は信心といへば皆如來廻向であつて苟も廻向なる文字あれば、決して私より佛に向ふ意味にはお讀みにならぬ。即ち成就の一念にしても、どんな事ありても我々が口に現はして初めて念佛稱へる、其の念佛の一念には仰しやらぬのである。こは『歎異鈔』一章にしても

彌陀の誓願不思議に助けられ參らせて往生はとぐるなりと信じて、念佛申さんとおもたつ心のおこるとき攝取不捨の利益にはあづけしめたまふなり。

念佛がまだ口に現はれずとも、「誓願不思議に云云」と信じて念佛申さんと思ひ立つ心が起る、其の時に既に攝取不捨の御廻向であると、斯く私共がはじめて如來の御慈悲に氣づき、さては心に頭が下る、其の端的の上に常に仰せられてあるのであります。「彼の國に生れんと願ずれば、即ち往生を得、不退轉に住せん。」――其のやるせなき佛の眞實が徹して、有難やと信樂開發の一念の有樣が即ち願生彼國の思ひである。其の生れんと願ふ者は「即の時往生を得。」此の「即の時」が時を隔てず處を隔てず、其の一念の所に間髪を入れず、直に往生の大益を蒙ることをお知らせ下されたものなのである。て聖人は常に淨土往生の時を、我々が此の肉身を畢るで時なく、平生の時此の廣大のお慈悲を聽聞して、一念開發の其時に直に往生であるとお示し下された。御存知の如く聖人は、法然聖人の御前に於て、他の御門弟に對し體失往生不體失往生の御爭論があつたとさへ申すのである。即ち他の人々が、此の肉體が失くなつた時往生と言はるゝに對し、聖人は一念の時肉體はありながら直ちに往生と、仰せられたと傳へるのである。

さりながら茲に間違ひ易きは、斯く此世ながら即得往生といふと、然らば信の上は此世が、直ぐ婆娑即寂光土となるのかといふに然うぢや無い。彌々眞に故郷の家に入るは、彌々長の此世の旅路を畢つて、故郷の門をくゞる時てなければならぬのである。去りながらまだ故郷の土は踏まずとも、ひと度びやるせなき親のお慈悲が身心徹到して、今迄の横着が申譯けないと親のお心に立ちかへつた一念には、もう其の時に於て既に心の根本に於ては、長の不孝の根源を超斷し、方角が一轉して、親の故郷にかへつたも同然の身として頂いて居るのである。て其の味ひが即ち即得往生なのである。『帖外和讃』には

超世の悲願きゝしより、　われらは生死の凡夫かは、
有漏の穢身はかはらねど、　心は淨土にすみあそぶ。

夫れ故其の一念にひと度び造る瀬なき親心を頂いた心は、もう如何なることありても、其の慈悲が無くなることもなければ、忘るゝ事も出來ず、引くりかへすこともなければ動くことも無い。即ち「不退轉に住せん」である。又聖人には茲の境地を「現生正定聚」と仰せられたお言葉もあるのである。長くなりましたから、又次席に申すことゝ致します。

（夏季求道會第三日第一席）

告白

知り拔いて居るから可哀相でとの思召ず

増田八重子

私は日蓮宗の家に生れましたが、子供の時から、常々母から如來樣の、廣大な御慈悲を、きかされました。其頃父は、母の存命中は誠に、自力の強い人で御座いましたので、意にさからはぬため、常に人知れず、一生御恩は、忘れてはならぬと、申呉れましたが、不幸にして、私の十四歳の時、世を去りまして、それより、引續き、父も姉妹もなくなり、度重なる不幸に、心淋しく、暮します内、夫の勤が、東京になりましたから、二人の子供とすみなれし、金澤を後に、上京しました。今から思へば全く仕合て御座いました。

不思議なる御緣で、松本樣には、大そう御恩を蒙りまして、實の親も不及程御奥樣が、私のことをいつも、御心にかけてくださいまして、長尾樣の御奥樣と御力を合せて、御導き下され、一昨年の五月頃に初めて、九段で先生の御講話を拜聽さして頂き、學舍の方へも伺ふ事が出來る樣になつて、夏季求道會の折には、大そうよろこばして頂きましたが、唯頂き方にのみ身がはいつてゐて、本當の御慈悲に氣がつかずにゐましたから、つい〳〵御稱名も氣にかゝつてゐても、用事を仕かけると、ついをつくうになつて、中々稱へられませんで、誠に〳〵おはづかしい事で御座いまして、其のことのみを氣にして、だん〳〵過します内、日をふるにつれて、

有がたくない樣になり、それが苦になつて、皆樣方に御目にかゝる事さへ、きまり惡くなつて來て、どうしようかと思ひましたが、新たに伺ひ直すも何となう、しぶとい私には致しかねて、とう〳〵二年間も過しました。すると今年五月、長男が急に發熱して、學校より中半にて歸りし騷ぎて、今まで一たん頂いたと思つてゐた悅びも、なくなつた矢先、左あらずとも、心配の折柄とて、常々仕舞込んである御本も、俄に拜讀して見る氣になりましたが、御同情下さる迄は、分らして頂きますが、今一つがどうしてもわかりません。そこで自分が子供を殘して死ぬる時には、如何して安心すべきかと思へば、一そう苦しみもまして、もはやとんと行きつまつて仕まひました。どうか今一度先生に御きかせ頂き度と泣き伏して、もがいても、夜半であり、致方が御座いません。ふと兼々伺つた事で、佛兼てしろしめしてとの御事を、氣がつかして頂きますと、汝の其有樣を、よく〳〵知りぬいてゐるから、夫が可愛想で見捨て置けぬとの、やるせなき大悲の親樣の思召が、全身にみち〳〵て、とじいて下されて、あつと思ふ一せつな、今までの苦も、すつかりぬけて、實に〳〵、不思議で御座いまして、其時の心持ちはとても、筆にも言葉にも、申樣がありません。今が今迄、これ程迄に思召して頂いたのか、私がなみはづれの、しぶといものであつたばつかりに、長々御心配かけてゐたのが申譯がありませんで、勿體なや有難やと深く感泣いたしまして、初めて、心からの御恩報謝御稱名が、あさましき私の口から、出ましたのも、一重に、大悲のみの親樣のやるせなき、御慈悲の上からで御座います。死別けた事が、勿體なくて〳〵、たまりません、つよくて長々御苦勞からぬ御高恩、御兩家の奥樣方の深き御深切をも、共々寸時も、忘るゝ事が出來ません。猶絶えぬ煩惱をも、御慈悲一つに、立かへらして頂きつゝ、大悲の親樣のみふところに、日送りさして頂きます幸福、何にたとへんやうも御座いません。をはづかしさもかへり見ず、拙き筆もて、長々と書かして頂きました。

南無阿彌陀佛〳〵〳〵

信仰を求むる方式をのみ考究致居候おろかさ

行村吉之助

一

謹啓、先生の御高名をしたひ、大悲のやるせなき、御心を尋ね度き事茲に數年、過日高森地方巡錫に際し、愚生の素懷をとげさして頂き申候、誠にかたじけなく、全く私一人の御惠みと存じ候。眞實の親樣は、私の惡のやまぬ、隔て心のやまぬ、父母孝養の出來ぬ、人生の落伍者を深く、御憐み下さるとの、御言葉身にしみて、うれしく、斯くの如き、まことの御方在りや、否やと、存在を疑ひし事の愚さ、誠に〳〵羞かしき心にて候。世の中に一人として、私の心のあり丈を知りてゐて下さる人なきに、今佛は私が心の奥を見ぬき給ふのみならず、その愚かなる、始末のつかぬをこそ、一入不憐と、思召す御本願と聽きては、一言の小言も無之、只々御稱名ばかりに御座候。

たとひ、法然上人にすかされまゐらせて、地獄に落ちたりとも、更に後悔すべからず候。

との祖師の御述懷今初めて相分り申候。

先生の御講話並に求道誌上にて、常に伺ひ居たる、「親心」幾度よみても、聽聞いたしても未だどうも、人生問題とかけ離れいたし居候處、先生の御膝下に、親しく人生問題を提出し御教化を蒙りてより、初めて氣付かして頂き、尙廿九日夜より、卅日夜にかけての、御講話は私一人のための、如く思はれ申候。

歸省後熟々思ふに、今迄の親樣の御心配、御心勞、如何にも、勿體なく候。

先生の、御かげによりて、心の煩悶もとれ、餘程樂と相成候。尙あり難き、御講話承り度く存じ候も、新學期開始の砌夜分なりと參詣致し度き希望に有之候。先は取敢ず書面を以て、御禮申上候。

南無阿彌陀佛〳〵〳〵

八月三十一日

二

殘暑漸く薄らき、秋冷日にまし相加はり申候處、先生樣には、御歸京後、御壯勝にて、靈界に御活動の御事と奉察り候。四十日間の、山口縣御傳道に就ては、一方ならぬ、御心勞にて候ひしならんも、毫も御疲勞の御樣子も、見受けず、洵に勿體なき、感じいたし候。小生如きは、日々の僅かなる動務時間さへ、物憂く、歸宅後は、綿の如く疲れ候に引かへ實に〳〵慚愧のいたりに堪へず候。小生事、久しき以前より人生問題の解決に苦しみ、先生の御芳名を、耳にするにつけては、御慕はしさの加はるのみにて、漫然日を過し來り居り候折柄、如何にも、眞摯なる、御講話にて、夢醒めし許り、彼岸の光明を認めさして頂き候事全く先生の御かげと深く〳〵感謝仕候。その後は、益〻單獨なる自己なることを、みそなはす佛の御慈悲を、よろこばして頂き申候。殊に以前よりも深く人生の頼みなきことを自覺し、それだけ、人生の土に現はれ玉ふ、大悲の矜哀を、味ふ身に相成申候。空曠のはるかなる澤に在る自己は、前後より、召喚と敎化とを、耳にしつゝ、念佛のみ申居候次第、兎や角の、理窟はなれて、只念佛のみぞ、まことにおはします、床しき御法こそ、げに我が根機に、相應したる、信仰に有之候。殊に弘誓四十八願中の、第十八願選釋本願の仰せ、誠にうれしく、して見ようなき自分にとりては、只一枚の手織より外なかりしかと、よろこばして頂き申候。以前には、「如何して信仰を得べきか」「如何して斯くの如く思ふべきや」など、理想的に求法致し居候事にて、何等人生の上に、信味を、得るに至らず、さりとて、求道誌上、御著「人生と信仰」「入信の徑路」「懺悔錄」などより、拜聞して、人生と信仰は、離るべからざるものとは存じながらどうも分らず、依然信仰を、求むる方式をのみ、考究いたし居候愚さ實に思ひ回らせば、馬鹿〳〵しく候も、矢張に、佛智の不思議の御方便にて候ひし。

病氣に苦しみ、人と人との交際に苦しみ、一家内の不和合に苦しみ居りし小生、殊にその上、信仰を求めんとしたりし、苦しき衷情はげに誰にも、語りしことこれなく候。然るにその私の苦しみ、惱める處を見て、如何にも、苦しいだろう、苦しいのは尤もだ、勿論、汝は、惡いは惡いなれども、その惡い心の、やまぬ汝があはれで、それが見捨てられぬとある御慈悲は、唯々親の心より、外に在らざりし事を、氣付かせて貰ひたるときの、うれしさ、とても、筆紙の能くする處に無之候。

嗚呼、弘誓の强緣の、慇切にも得がたきを得たる身の、よろこび、何者か、これにかへんや、深く〳〵御禮申上候。

尙申述たき儀の有之候も、之位にて、擱筆仕るべく候 頓首

講話

超絶の力

（求道學會日曜講話）

近角常觀

超絶の文字

一、超は「こえる」絶は「たつ」である。親鸞聖人は佛の本願力のことを横超他力と申された。即ち「よこさまにこえる」といふ文字である。横超の文字は眞宗の者は常に用ゐて居るのである。けれども、其の文字によりて現はされたる眞の意味を頂かねばならぬ。

二　先づこの超絶の文字は、經文の中では何處にあるかといふに『大經』の中に在る。

必ず超絶して去ることを得て、安養國に往生せん。横に五惡趣を截り、惡趣自然に閉づ。道に昇ること窮極無し。往き易くして人無し。其國逆違せず、自然の牽く所なり。

茲にある超絶の文字を聖人は注意して喜ばれたもので、それより御存知の如く『信卷』には、此の超絶の字を用ゐるにつき種々なる經文があげてある。恰も本年度『求道』に連載する「信卷講義」中にある處故、それを御覽になれば分る。そこには「横超斷四流と言ふは、云々」といふ横超の言葉を用ゐるにつきての御ことわけがいふてあつて、次には

大本に言はく、無上殊勝の願を超發す。又言はく我れ超世の願を建つ、必ず無上道に至らん。云々。

それより今の『大經』の文をあげさせられ、

大阿彌陀經に言はく、超絶して去ることを得べし。阿彌陀佛國に往生すれば、横に五惡道を截つて、自然に閉塞す。云々。

三、斯く聖人が「無上殊勝の願」とか、「超世の願」とか、「超絶」とか、かく超字を度々繰返して言はれてあるは、茲に當り前ならざる力があるからである。飛び超えられるは飛び超えられる丈けの力あつて飛び超えられるの故、今は其の力を知らして貰はねばならぬ。今人生問題に於ても、我々が佛のお慈悲で、人生に初めて安心を得させて貰へるといふは、茲に人生の苦勞を一遍に飛び超える丈けの力あつて、初めて解決が得させて貰へるのである。

露骨にいふと

四　そこで露骨に言うと、近頃私は皆さんにこういふ感じがある。既に充分御安心の人はよいやうてあるも、それても注意せぬと、恰も探し物するやうな有樣てあることがある。設へば私共が探し物――茲に扇子を探すとする。私の方は有る〳〵と申して居るに、皆さんは「無い〳〵」と仰しゃる。私の方は茲に卓上にちやんとあることを見て言うてるのであるけれども、皆さんの方は、一度探しに來て「無い〳〵」とお歸りになる。又來て「無い〳〵」と歸へる。探せば探す程、注意せぬと何度手に觸れ、目に仕て居つても「無い〳〵」と去つて仕まふことがある。それと同じて何度聞いても此のお慈悲が

分らぬは、「あゝ斯う」と自分の方よりいつも同じ聞きやうに聞いてしまつて居るからである。

五　又彼處にゆくと有ると思うてお出でになる人がある。その有るが、有るやうな氣もするのであるけれども、しつかりして居らぬ。矢張り探し物すると同じ具合である。私は元來そゝつかしい性で、能く時計が無い。「机のとこを見たけれども無い〳〵」と騒ぎ廻はつて居ることがある。實は机にちやんと在るのであるけれども、見やうを雜にして居るから見えぬてある。そんな見やうを何時迄仕てたつて、見つからう筈は無い。

六　又其の代はり「彼處に有る」と、無いものを有ると思ふて居ることがある。今迄聽き慣れて居らるゝ人は、之になつてる人が多いのである。彌陀の本願がましますのだとしつかり物を持たずに、唯然うあると思うて夫れて滿足して居らるゝ。夫れ故「どこに在る」「どこで安心してる」と押されると、「たしか机の上に有つた筈ぢやが」といふやうなことになつて、其の有るが甚だ確りして居無い。で斯う何時迄もしつかり頂けぬは、いつもお慈悲の肝腎のとこを落してしまつて居るからである。故に言ふものも、もつと親切に言はねばならぬが、聞く者もしつかり角を立てゝ聞かなくてはならぬ。

七　殊に今度私は地方傳道より元氣で歸り、さて皆さんに接すると、其の聞く聲が「しばらく聞かぬ中に又苦しくなりました」などゝ、凡て苦しい方、喜べぬ方、あと戻りした方の聲が多いのである。その然うなるは、實際問題に於て皆さんが超絶する所が頂けて居ぬからぢや。何時迄も人生の苦惱界に沒頭してばかり居て、「喜べぬ、この者をお助けぢや、お助けだけれども喜べぬ」と斯くぐる〳〵廻はり仕て居つて、此の人生の苦をぶち切つて解脱する處の超絶の味ひが響いて居ないからである。即ち聖人が超世の願と仰せられ、横超の直道と力强くお示し下された、斯く著しく超絶を言はるゝは、言はるゝ丈けの著しい事柄があるからだといふ處を皆さんに充分聞き取つて貰はねばならぬのである。

或呉服店主の話

八　抑々聖人が、超世の悲願と仰せられ、無上殊勝の願と言はるゝは、夫れに何程の意味が有るのであらうか。先づ私共日常人生の事柄の上より、超世の意味を申したらよからうと思ひます。

九　夫れには茲に福島縣の或呉服屋の御主人の話がある。夫れが味ひが深いから、夫れを申したらよからうと思ふ。或呉服店主が居られて、お子さんを敎育なさるのに、何うか質朴に質素に育て度いといふので、店の番頭丁稚同やうに、角帶をしめさせ前掛をつけさせて、やつて居られた。それ程にせらるゝに係はらず、或る時小供が外に出でゝ、他の子供に勸められてハイカラ品を買うて來た。

一〇　すると主人が見咎めて、「お前何ぢや、こんな物を買つて來て、お金を何と心得て居る。此の金は先祖より頂いた一文でも尊い金であるに、夫れをそんなに粗末に仕てはならぬ。そんなものは買つた家へ返して來い。元來拂つてやる可き金では無けれども、今度丈けは拂つてやるから、その代はり汽車になど乘つて行つてはすまぬ、歩いて行け」と嚴しく言ひ

渡して、夫人を呼び「歩いて行くのだから握り飯をこしらへてやれ」と言はれる。小供は泣く〳〵握り飯を持つて出て行つた。

一一　するとあとより主人が夫人を呼び「出て行つたか」「ゆきました」「汽車賃をやつたか」「イヤあれ程貴方が仰しやつたのだからやりませぬ」と言はれる。すると言下に「馬鹿め！俺はあれ程言うたけれども、貴様がやるだらうと思ふて居たに」と、大に叱られたといふ話なのである。私は此の話は地方でも度び〳〵した。飛び拔けてる親のお慈悲であるのであるけれども、皆なが飛び拔けてる處に氣がつかぬ。

一二　現に私が子供に對するが之と同やうなのである。昨夜子供が遊び道具の鐵輪を失うた。「そんなら捜して來い、粗末に仕ていかぬ」といふので今朝から皆んなで捜して居ると。横から外の子供が「あれは坊ちやんが外の子に遣つたのだ」といふ。「それなら然うと何ぜ早く言はぬのか。外の子にやるのはかまはぬけれど、默つて虚言つては宜しく無い」と厳しく子供を折檻する。其の下から「當り前ならもう買うてやらぬのだけれど、今度丈けは特別に買うてやるから、粗末に仕てはならぬ」と言ふやうになるのである。

一三　又此間も或處で、今の呉服店主の話を仕た。すると其處の御主人も「私も三人の子供があつて、上二人はよけれども、三人目のが何ういふものか奉公をしたがつて仕やうが無い。出してやると月に十四五圓貰ふのだけれども、中十圓は食料に引かれ、殘る小使ひは僅しかない。毎日大きな車に呉服物を載せ、から〳〵引き廻はつて居るのだから、途中で相當の小使ひも入り無くなつて仕舞ふから、時々やつて來ては呉れ〳〵と言ひます。修行の爲め出して置くのだから「何を言ふてるのか、お父さんなど若い時は、ウント辛い目を見たものだ、そんなものはやれぬ」と厳しく言うてるものゝ、心では家内に早く出してやれと思ふて居る。又御馳走などある時は、一番先きに其の子供に喰はせてやり度いなど思ひます」と話された。

一四　即ち一方で斯く厳しく叱り出した父親が、一方母親が汽車賃やらぬと言ふと「何だ、馬鹿め！」と叱る處が、親のお慈悲の超絶したる有難い處なのである。處が私共の方は之を何うとつて居るかといふに、今の「いつでも有る」と思ふてる側は、「お父さんは甘い、あゝいふてるけれど、呉れるに決まつてる」と思うて居るのである。「特別々々といふてるけれど、あれはお父さんの決り文句だ」と、親の特別を此方で當り前にしてしまつて居るから、親の超絶が超絶にならぬのである。すると親の方で腹を立て叱り出すと、今の呉服店の子供で、父親を恐ろしがり逆げてばかり居て仕やうが無いから父の心を聞かせて呉れと、私のとこに連れて來られたのである。即ち私共は此のどちらかになつて居る。すると之では何ちらも、親の恵みの超絶の超絶たる處が頂けて居ぬのである。

超絶の慈悲たる所以

一五　そこで之を佛の本願の上より言うと、佛の本願は當り前助かる者を助けるとの仰せぢや無い。助からぬ者を助けるとあるお慈悲であるから、超世の本願であり、人生より飛び拔けて居るのである。處で其の助かるまじき者を助け給ふと

いふ味ひは何處であるか。之を申さねばならぬ。

一六　先づ私共常に考へて居ることは、「人間は自分より善いことをすればよい、悪いことすると不可ぬ」とは、誰しも理窟なしに皆な然う思ふて居るのである。即ち諸佛の本願といふは之であつて、諸佛の教へは「衆悪莫作諸善奉行」――諸の善を作せ悪いことは仕てならぬといふとこに結著するのである。故に我々は此の人生普通の教へよりゆく時は、如何にしても往かれぬにきまつて居るのである。

一七　何故かといふに、我々は如何にしても善くは出來ず悪が止まら無い。即ち三學六度の行を修し、持戒堅固の身として、法の如く迷を翻し悟りにゆく事が出來るならば、夫れは善につき悪を去る普通の教へによりてゆかれるのである。けれども我々は、實際今日迄夫れでやり來つたのであるけれども、如何にしても其の教では安心することが出來なかつた。即ち如何にするも善は出來ず悪は止まぬから、助らぬのである。即ち設へ金は持たして返しにやるにした處が、歩いて行かぬならぬ間は、まだ當り前の道たるにとどまるのである。

一八　處で茲で一言するに、爾らば他力は初めより善は出來ぬ、悪は止まらぬと始めより投げ捨てる教へかといふに、然うぢや無い。併しながら人間は、如何なる者でも「自分は善は出來る悪はせぬ」と言ひ得る者が有るかといふのである。若し夫れが出來るならば、其の人は眞に理想的で、偉なりと言はなければならぬ。が人間は理想が高まれば高まる程必ず「出來ぬ」となるに決まつてるのである。故に若し「自分は善を仕て居る、悪は仕て居らぬ」と思ふて居る人あらば、大間違ひと言はんならぬ。しかし強ち理想を高く持てと言ふではなけれども、初めより投げやつて置く位なら、何も超世の本願は入らぬ、助けてやる必要は無いのである。しかるに何程思うても、我々其の仕度き善が行へず、止め度き悪が止まらぬから、茲で我々行き詰るのである。

一九　處で其の善出來ず、悪の止まざる樣が如何にも可哀相故之を哀はれと思召し、「其の出來ざる者を見捨てぬのぢや、其者を飽く迄助けるのぢや」とある思ひがけなき大悲の仰せが、佛の眞實、超世無上の本願であるのである。今の歩いてゆけと言ふたとて、小供の分際としてゆけぬから、やる可きて無けれども、内證で金を下さるが親の超絶の慈悲である如く、我々の其の苦惱が如何にしても止まぬから、其の止まぬのを見て下された大悲の佛は、「其の止まぬのが如何にも可哀相ぢや、其者が見捨てられぬ」と、茲に常倫に超出した特別の大慈悲を以て向うて下されたが、佛の本願であり、五刼永刼の佛の眞實でましますのである。之が實に佛の本願の超絶のお慈悲にてまします所以なのである。

對等的態度で聞いて居る人

二〇　殊に私の思ふは、常に申す御文なれども、『唯信鈔』のたとへば人ありて、高き岸のしもにありてのぼることあたはざらんに、力強き人の岸の上にありて、綱をおろして、此の綱にとりつかせてわれ岸の上にひきのぼせんといはんに、引く人の力を疑ひて綱のよわからむことをあやぶみて手ををさめて之をとらず、さらに岸の上にのぼることを得べからず。ひとへに其の言葉にしたがひて、たなこゝろを

のべて之を執らんには、すなはちのぼることをうべし。佛力を疑ひ願力をたのまざる人は、菩提の岸にのぼること難し。信心の手をのべて誓願の網をとるべし。佛力無窮なり、罪障深重の身をおもしとせず、佛智無邊なり、散亂放逸の者をもすつることなし。唯信心を要とす。そのほかをばかへりみざるなり。

こは常に言ふ喩へなれども、先きの「必得超絶去往生安養國」の意味、即ち超絶の御力なることが、此の喩と全く同じであることに氣づかせて貰うたのである。此の喩へが其意味によく合ふと言ふよりも、寧ろ其の意味が此の喩へに如何にもよく表はされてあると言ふ方がよい。此の喩は全く其の意味を現はされたものに外ならぬのである。

二一　即ち我々崖の下より上に登る可きが當然なのである。けれども如何に登らんとするも攀ぢ上れぬ者故、其の者を哀れみ思召して、上より引き上る思ひがけなき救ひの力が現はれた。此の「登れぬ奴の、登れぬとこが哀はれである、善く仕やうとするも出來ぬが彌々可哀相である」とある此の大悲の遣る瀬なき處を能く頂いて貰はねばならぬ。

二二　ちと老婆心に渡るけれども、皆さんが信仰が得られぬ〳〵と言はるゝに色々ある。近頃私の著しく感ずるは、「私は聞いても〳〵喜べぬ、あれ程御親切を聞かされても喜べぬは何故で有らうか」と、此の不審が大分にある。昨日も或方が言はるゝには、「あれ程の有難きを聞き、何故喜ばぬので有らうか、何故あれ程きゝながらこんなことを言ふてるのであらうかとの思ひがある」と言はれる。之には私かつきり申さねばならぬ。

二三　夫れは佛のお慈悲と五分々々の態度で聞いとるからなのである。向ふが夫れ程親切に言ふて下さるのであるから、「有難う」と返事し、お請けせねばならぬと、即ち飽く迄辭禮的態度で聞いて居るからである。「五分々々の挨拶をするが當然なるに、何故有難いと言へぬのだらう」と、即ち言葉は殊勝であるも要するに對等的態度なるを脱れ無い。「佛が夫れ程御親切の仰せであるから、此方も有難うと請けられさうなもの」といふのでは超絶でなくなつて仕舞ふのである。

二四　之は此間も「何故もとのやうに喜べぬてあらう」と困つて居らるゝ方に對し、通俗なる譬を以て申上げた。「或る金持の人あつて、他の困つて居る人に對しお前の一身を引き受けたといふので、家を始め家財萬端皆なこしらへて呉れた。一方も有難いと喜んで交際して居る中に、何かの機會に金持から何か物を貰うた。そこで其者が之ではすまぬ、自分も一本立ちになつたのであるから、何か返しをせなくてはならぬと苦心して居ると、同じでないか」と申したのである。「先方から何もかも皆な貰うてやつと一人前になつて居ながら、昔忘れて自分も一人前になつたから、有難うと返禮せなくちやならぬ、後念が喜べぬので困るなどゝは、何言うてるのであるか」と申したのである。又或人は、「一旦喜んで、まるで佛をだまして置いたやうなものだ」と言はれたから、私は言下に「君などにだまされる佛なものか」と申した。最も何れも後念にかけて申したのである。

二五　併し後念であらうと一念であらうと、「あんなに仰しや

るにもつと喜べさうなもの、一言有難いと言へさうなもの」といふ、其の態度が即ち高慢な五分々々でないかと申すのである。處が其の言へぬ者の言へぬとこを見て、其の如何にも言ふべきが言へぬとこが可哀相であると、茲に特別の大悲を以て眺めて下されたが、超絶したる佛の大慈悲にてまします のである。

私の苦しんだ時も

二六　斯く話しつゝ思ひ出すと、私のお慈悲を知らして貰うた時がやはり之であつたのである。其時私は今迄長い間、人の爲めによくして居る、法の爲めに盡くして居ると、高振つて居たのが、次第々々に皆な駄目になつて來て苦んだ。すると夫れ迄の自分は善いことしてるといふ立場は最早や駄目であるが、其の善く無い自分の性分をよく知り盡くして、而も其の性分に滿身の同情を持つて呉るゝ友人は無いか〳〵と考えた。處が友人はありて皆んな慰め、頻りに親切にして呉れてるのである。けれども其時、皆んながあんなに親切にして呉れ、今迄考えの中にも置かなかつた友人迄があれ程迄に仕て呉れる「あゝ君はよく仕て呉れる」と、心より一言此方より言へたら、皆なも滿足も仕て呉れやうけれども、此方が斯くふくれて居るのでは、之では迚も駄目だといふ氣が、何うしても離れ無つたのである。

二七　之は屹度どなたにもあらうと思ふ。「あれ程迄に言うて呉れるに、此方がハイと受けられたら、言ひ甲斐あつたと向ふも滿足して下されやうけれど、夫れが受けられぬから困る」と。露骨に言ふと、「先生ぢやとて、あれ程何度も〳〵聞かせて貰つて、あとから〳〵斯く毀れるやうでは、先生ぢやとて呆れてしまはれるであらう」と、之が屹度あるだらうと思ふのである。

二八　之は何か。餘り何度も〳〵一つことを繰返して居ると、屹度呆られてしまふだらうといふ豫期があるからである。で私は其時「然ういふ何時迄も疑ひ深いのが君の性分ぢや、どこ迄も人の厚意を仇にし、受けられぬが君の性分ぢや、然ういふ君の性分であるとこを我は百も承知した上、そういふ君が可哀相で離れられぬといふて居るのぢや。此の上は、君は勝手に何なりと思うてりやよいでないか、我の方にてはどんな事ありても變はらぬから」と、斯う迄言うてくれる友人が欲しかつた。

二九　之は過般も呉市に於て或人が、「之れ程お聞かせに預りても、「ハイ有難う」との一言が出ませぬ」と悲しまれたから、私は「其のあなたの苦しい處を、それを知らぬ親ぢや無い。親はあなたの、其の氣の重い、其の性分が可哀相て、設え返事しやうとせまいと、其のあなたが不便で捨てられぬとある廣大な親の御實意である」と申たら、其人大に喜び下された事であつた。茲が即ち私共の如何と全くかけ離れたる超絶である。飛び拔けたお慈悲でましますのである。

三〇　も一ついふと私など苦しんだ時は、斯ういふ考があつた。「自分とて出來る丈けは人の爲めにもよくし、法の爲めにも盡くせる丈けは盡くさうとして來て、遂に斯くは遣りぞこなつてしまつたのである。て誰か人あつて、せめて斯くやりかけたけれども出來なかつたものである點丈けは見て欲し

い」と。處が今超世の本願は、我々があれがよい是れがよいと色々藻掻く丈けは藻掻いて見ても遂に駄目であつた、其の哀はれな處をば見て下され「如何にも其の思ふは最もである、其者が如何にも可哀相で」とある思召にてあるのである。即ち如何に悶えて見ても何うしても上には上れぬ、其の上れぬとこが哀はれで、上より下げて下された、お見捨てなき南無阿彌陀佛の網なのである。

三二　殊に思ふは御存知の如く、『大經』の本願の文の上には「唯除五逆誹謗正法」と、即ち其のやうな者には辯當はやるが汽車賃は遣れぬと除かれてある。それが『觀經』にいくと下品下生段に於て、五逆十惡具諸不善の者が、唯南無阿彌陀佛一つで助かるとかいてある。すると『大經』と違ふのかといふに然うぢやない。『觀經』に助かるとあるは、助かる可きを助けるとあるのでは無い、助かるまじき五逆十惡なれども今現に夫れが起つて來た故、助けずには措けぬとある特別のお慈悲であるのである。

善導大師の『觀經の疏』及『大經』の三毒段

三三　此頃も私は善導大師の『觀經の疏』を讀んで驚いた。善導大師が特に有難き方なることは、常に親鸞聖人の御指圖で頂いて居るのであるけれども、段々頂かして貰へば貰ふ程有難い。此間も『玄義分』を讀みつゝ思ふた。大師の當時に、色々の人が『觀經』を讀み、皆な大小の聖人が之によりて修行すべき經と言ふて居らるゝに係はらず、大師一人は『觀經』は聖人の爲めの經では無い、韋提希天人なる凡夫の爲めに說かれた經であるとお知らせ下されてある。即ち韋提希天人なる女性の願ひによりて、

汝は是れ凡夫なり、心想羸劣にして未だ天眼を得ず云云。

と言はれ、又

佛滅後の諸の衆生等、濁惡不善にして五苦に逼められん。云何か阿彌陀佛の極樂世界を見たてまつるべき。

と言はれてあつて、即ち未來世の衆生が苦しからうとて、說かれた處の經である。すれば韋夫人なる女人の爲め、又未來世の五苦の衆生の爲めに說かれた經でないか、とのことが至る所に言ふてある。即ち今私共御婦人達を始め、斯く苦に逼められ惱んで居る、それを見て御見捨てない處の佛の大慈悲を言はれたのが『觀經』一部である、といふことが『玄義分』には知らされてある。かくてこそ私共聖人が

然れば淨邪緣熟して、調達闍世をして逆害を興ぜしめ、淨業機彰れて、釋迦韋提をして安養を選ばしめたまへり。

と、いつも阿闍世や韋提希のことを書きて、夫れがひと事でないと喜ばれた御心持も伺はれるのである。

三三　殊に我々、善導大師の御文を頂くと、あらたかで氣持が惡い程に書いてある。御存知の如く『玄義分』をものし給ひた時など一僧指授と申して、毎夜夢中に一人の僧現はれて一々指授したと申す程に、神聖此の上もない聖敎である。されば こそ自ら

一句一字加減す可らず、寫さんと欲する者は一に經法の如くせよ。

とある程に、即ち經文も同じ御聖敎であるのである。

三四　すると今『大經』に、『唯五逆と誹謗正法を除く」とある

佛の御本願の眞意は、『觀經』にゆきて、五障の女人五逆の惡人の苦をば見て下さる廣大のお慈悲となる。で今私共は、超世無上の本願といふことは、唯諸佛に優れた本願といふ、本願の講釋にして置かずに、其の優れた本願で無けねばならぬのは、即ち我々が斯く當り前ではゆけぬ人間である、罪惡の止まぬ仕て見やうなき者であることを見て下されたものである爲めに、其の者を捨てぬ廣大の哀れみが、超世無上の本願であることを頂かねばならぬ。斯く私の仕て見やうなき心の上に頂け來るお慈悲でなければ、超世とあり無上殊勝とある本願の思召の程は分つて居ぬとなるのである。

三五　猶は今一つ此の味ひの上より申し度いのは、御存知の如く『大經』下卷の中には三毒五惡段といふのがありて、私共の惡しき心の樣が、殆んと腹をえぐられる程にお示し下されてある。一寸ひと所を引いても

然るに世人薄俗にして共に不急の事を評ひ、此の劇惡極苦の中に於て、身の營務を勤めて以て自ら給濟す。尊と無く卑と無く貧と無く富と無く、少長男女共に錢財を憂ふ。有無同じく然なり　憂思適に等し。屏營愁苦して、念を累ね慮を積み、心の爲に走せ使はれて、安き時有ること無し。田有れば田を憂へ、宅あれば宅を憂ふ、牛馬、六畜、奴婢、錢財、衣食　什物復共に之を憂ふ。思ひを重ね息を累みて、憂念愁稀す。云々。

と、斯く人間の惡心の樣、賴りなき樣、無常の樣が面を蔽はならぬ程に書かせられてある。

三六　こは何かといふに、今の「唯除五逆誹謗正法」と釋尊の抑止の意味が玆に來て、「斯う迄惡い者故不可ぬ」とお戒めなされたものである。けれども其の不可ぬ者故助からぬのかといふに、否、其の仕てならぬ惡い事仕て毎日日暮して居る我々が現に存して居る。故に其者が可哀相で捨て置けぬ故、玆に特別のお慈悲が現はれたのが彌陀の本願であるといふ、即ち超絕の御慈悲の御眞意を明かに仕て下されたのが此の三毒段五惡段の御說法であることを頂かして貰はなくてはならぬ。で先きの「必得超絕去(乃至)自然之所牽」の文は、實に此三毒段五惡段に移る前の處にある御文なのである。即ち今お知らせ下さる佛の本願は尋常一やうのお惠みではない、斯く仕てならぬ三毒五惡であるが、夫を現にして居る、五逆十惡の我々である爲めに、其者に對するお見捨てなき特別の大悲の願心が佛の本願であることを頂かして貰ふでなければ、玆の處は讀むことは出來ぬのであります。

横に四流を超斷す

三七　さて已上は超絕の御本願といふ上より申したのであるが猶ほ少し際立てゝ、此の廣大のお力により、人生ぎり〳〵の苦しみを超斷して、安心を得させて頂く味ひの上より聞いて頂き度い。私共此の人生の苦惱を此の廣大の惠みにより超絕して安心させて貰ふでなければ、何時迄慈悲々々と申して居つても、終に人生より出る事は出來ぬのである。故に此の惠みにより人生の苦惱を切り離される處を聞いて貰はなくてはならぬ。常に私の言ふことであるが、もう玆が屆くか屆かぬかゞ、此の超絕の大悲が人生に響くか響かぬかの結局になるのであります。

三八　先づ皆さんが大低斯うなりてある。即ち人事關係に就いて言へば人が自分に對する仕打ちが氣に入らぬとか、又自らが人に對して善く出來ないとか、之が抑々人生問題の初めなのである。而して之が彌々ぎり〳〵に押し進めば、人が自分に對する態度が如何にも無念で、殆んど身も世もあられぬ程に悶えるとか、又自分が人に對し如何にしても善く出來ぬので何時迄も仕て見やうなく一つ事に屈托して出られぬとか、即ち外界より自分に對する態度と、自分か外界に對し思ふさま出來ぬ事と、――若し茲て廣大のお慈悲で茲を超絶させて貰へば頭が下り樂になることが出來るのであるけれども、爾らざれば何時迄も此の善い惡いの二つが纏綿して、如何にしても斷つことが出來ぬとなつて居るのである。

三九　そこで先づ他力には面白き言葉がある。即ち初めに申した横超なる言葉は、何に續く語かといふに、横超斷四流とある。言葉であつて、即ち横に四流を超斷すると讀む文である。而して其横は竪に對する横であつて、竪とは漸々に修行して佛になる道が竪であり、横は其の竪に行く可き處を一邊に横に飛び超えるが横である。即ち竪は自力、横は他力と親鸞聖人はお知らせ下された。一體聖人の頭は不思議な頭で、一方に非常に緻密なことを言うてあるかと思ふと、一方には斯く調子はづれなことが言うてある。て横は即ち俗にいふ横紙破り。横超斷四流は竪に愚圖々々してるよりも、一邊に横紙破りにバラッと横に飛び超え斷ち切つて仕舞ふといふのである。故に信仰には此の飛び超えぶち切つてしまふ味ひがなくてはならぬ。

四〇　處で今の「人が善い惡い、自分が濟む濟まぬ」之を何時迄も繰反して居るのでは、まるで飴延ばすやうで何處迄いつても切れる處がない。私など元來飴の性分で、甚だ切れぬのでよく無い。是非共信仰上には切れる處がなくてはならぬのである。處で一方には

不斷煩惱得涅槃

などいふ言葉があつて、切れ無いとお示し下されてある。故に皆なが切つたやうな、切れないやうな味ひに頂いて居る者が多い、となつて居るのである。

四一　全體「不斷煩惱得涅槃」とは、自分の自力では切ら無いといふお言葉なのである。自分の力で煩惱を斷ち切つて安心を得るのならば、夫れは自力聖道門の敎故、他力に於ては私の力で切る事は出來無い。若し切れるならば

煩惱を斷じなば、すなはち佛なり。佛のためには五刼思惟の願、その詮なくやましまさん。

故に私の力では如何しても切ることは出來ぬ。

四二　去りながら今五刼思惟の彌陀の本願は、「其の如何にしても切れぬ處が可哀相である、斷てぬ者故捨て置けぬ」といふ廣大なお慈悲に過はせて貰ふたのである。故に此の廣大のお心を頂けば今日迄「あーから」、「喜ぶ喜べぬ」などゝ切れぬのに困難して居たのであるが、此の切れぬ者をお見捨て無い思召とは如何なる御不思議かと、茲にすつぱり今迄の善し惡しが切れて仕まふ處があるのである。

お慈悲を遁け廻はる根性

四三　こは御同やう人生上の「すむ、すまぬ」「仕度い、出來ぬ」

を何時迄やつて居ても、何時迄たつても切れるといふことは無い。故に「切れ！」とは一つも仰しやらぬ。否な切れぬ爲めに何時迄も人に不足の念が去らず困つて居る、その哀れな必底迄お取上げ下されて、――夫れも今俄に初まつたのでは無い

三恒河沙の諸佛の、　出世のみもとにありしとき

大菩提心おこせども、　自分かなはて流轉せり。

昔から今日迄其の思ひの止まないとこ、其の出來ない點をば疾うの昔から御覽下されて、其の止まず出來ぬ處をば哀はれと見て下さる超絶のお慈悲でましますのである。故に御同やう茲を頂かなくてはならぬ。

四四　さて然ういふと皆樣は「然う言うて下さるけれども、喜べぬ」と仰しやる。喜べと誰が言つたかと言はねばならぬ。否な反對に「汝は喜べぬだらう、頂けぬだらう、苦惱から離れられぬだらう、逆境に落ち殘念だらう、善くなれぬて苦しいだらう」と、其の苦しいよくなれぬ處を大悲心より御覽下されて、其者を御見捨なき遣る瀨なき思召が佛の御本願であると申して居るのである。

四五　すると皆樣は又茲て得手に持ちかへて、「それては喜べいでもよいのぢや、淺間してもよいのぢや」と聞かれるから分らぬ。今御同やうが其の仕てならぬ惡が止まず、苦み悶え、涙を注いで居る。「其のよくなき事をして居る樣が可哀相て、如何にも汝は苦しいだらう」とある思ひがけなき御眞實であると申して居るのである。すると又前に戻つて「然う聞いたら有難くなるのだらう」と――そんな先き廻はりをし、横の方にそれて仕まふから肝腎の思召の方が頂けぬのである。自分が喰べられぬから、人が親切に遣らうと言ふて〻下さるに、受けることをせぬて、自分が受けられる受けられぬの勘定を仕て居る者が何處に在るかと言はなくてはならぬ。今佛の大悲は我々が其の頂けぬ、業報に閉されて出られぬ身の上ぢや故夫れが哀はれて見捨てられぬと言うて〻下さる御眞實であると申して居るのである。て茲になると佛のお力は一切無碍て、此方が困る所行き當る所を、其處ぢや〳〵と其點々々をやるせなく思召し、お照らし下さる廣大のお慈悲でましますのである。爾るに私共の方は然う言はるれば言はる〻程、自分で手を後に廻はし、「斯う迄言つて下さるのだからも少し喜べさうなもの」と、斯ういふてるのがはや佛に對し五分々々て向つて居るものなのである。

信仰を得んならんと思ふ誤り

四六　夫れ故眞實御慈悲が徹して下さる一念には、私共の方に此のお慈悲を頂いて何う、といふ目的などあることは無い。殊に他力を聞き慣れてお出での人に有りうちな間違は、信仰を得んならぬと、皆なが信仰を問題に仕て居らる〻事てある。頂かんならぬ〳〵と思ふて居られるから何時迄も頂けぬ。「今日は頂けさうなものだが」と頂くことを眼目にして居らる〻。そんなに迄して何の爲めに、頂かんならぬのか。信仰を恰も自分の名譽の如く、又何人かありて頂け〳〵といふてるもの〻如く思ふて居らる〻のが間違ひてある。

四七　こは親鸞聖人も

詮ずるところ愚身が信心におきてはかくのごとし。このうへは念佛をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも

面々の御はからひなり。

と仰せられてあつて、面々の自由だと仰せられある。夫れに銘々の方で勝手に「頂かんならぬ」といふ頭をこしらへ、「頂く爲めには聞かぬならぬ、聞くには本氣でなければならぬ」など、自分で自力の積み累をやつて居る。夫れだから皆んなが何時迄たつても頂けぬ、無駄骨折りて頂けぬ、聞き慣れに落るとなつて來るのである。即ちこれが何か、自力の菩提心は無いとお知らせ下された。其の意味は我々の方で「何うせんならぬ斯うせんならぬ」乃至「信仰を得んならん、喜ばんならん」と何程思ふた處が如何にしても頂かれぬ喜べぬ。其の如何にしても頂けぬ者故、夫れが可哀相で見放さぬとある大悲が、彌陀の本願でないかとお知らせ下さるのである。夫れ故私共の方でせぬならぬことしては信仰上には一つも無い。

四八　殊に此の夏の傳道に於ては、此の得んならぬ〳〵といふてる人が非常に多かつた。一々には言はぬも或青年の如きは、多年この得んならぬ〳〵で自分で信仰を作り上げ、夫れて自から安んじて居られる人があつた。夫れ故一言それが作り物だと知らされると、今迄多年やつて來たのが何やつて居たのかもう仕やうがない。處が今佛のお慈悲は其の仕やうなき、その者をお見捨てなき思召ときくなり、目がさめた如く初めて御安心下されたのである。

四九　で此方にしても、夫れ迄多年やつて來られたことが、一つとして間に合ふなら、法然聖人が四十三歳の時、今迄のを抛げ捨てたと仰しやつたのは虚事になる。又親鸞聖人は廿九の時迄苦まれたから頂けたとなり、近角は苦しんだから信仰に入れたとなる。何ぞ知らん今迄のは皆んなお慈悲に反した馬鹿骨折り、持前の迷情の爲め詮方なくも入らざる苦勞をやつて居つたのである。爾るに今思ひがけなく其の仕方なき樣を哀はれみて、横合より飛んで出て、其者を捨てぬと遣る瀬なく言ふて〻下さる佛のお慈悲が實に超絶の御本願。斯く仰せが既に超絶の大悲である故、之を頂いた時には我々も其の御親切一つで人生の苦を超絶できるとなるのであります。

五〇　處が茲に氣をつけなならぬのは、世に所謂超然主義なるものがある。之になりてはならぬのである。世に所謂超然主義は、人生と無交渉に、超然として在る超然主義である。この事に取て貰ふてはならぬ。佛の超絶は然うではなくして、反對に總ての者が恐れ呆れ、遁げ去る所の私共の惱み苦しみに、佛の方より哀れみ、近づき、しがみついて下さる處の超絶である。この點より言ふと、寧ろ在來の宗教は人生に超然しすぎて居る。言ひかへると、此の他力の教にしても、今迄の說き方が、餘り人生問題に超然仕過ぎて居た。

五一　然うではなくして、私共が日々人に不足の念を抱き、或は悲み恨み、現に色々思うて居る心中――誰あつて一人汲みとつて相談にのつて呉る〻者なき此心中に對し、その爲めに向ふ樣より態々進んで出て、「如何にも汝は苦しいであらう、無理も無い、汝一心正念にして直に來れ、我能く我を護らん、衆べて水火の二河に墮せんことを畏れざれ、其の苦も惱みも我が悉く知り盡くして捨てぬ心故、憂ふるには及ばぬぞ」とぢかづけに言ふて下さる大悲の呼聲が、佛の本願であるのである。夫れ故私共此の廣大の大悲に接するもの故「あゝ今日迄何うにかなるとと思ふて人相手に愚圖々々言うて居たが、申譯けなき間違にてあつた、人に彼是れ註文してた自分の方が實に惡うムりました」と茲に方角が一轉して今迄の彼是れを斷ち切る事が出來るが、之が人生を超絶せさて頂く處の味ひであるのである。

講義

歎異鈔

近角常觀

第十三章（第四號に續く）

「この條本願をうたがふ善惡の宿業をこゝろえざるなり。」

この一句は一應見て頗る了解し難き言葉である。言葉を足して平易に言ひのべたならば、この條本願の不思議を疑ふものにして、從つて自然善惡の宿業を心得ざることゝなるのである。言ひ換へたならば、如來の本願は善惡の宿業をお見通しありて如何なる所作をする者なりとも、是れ皆な宿業の催しなることを知召して、飽く迄見捨て給はざる不思議の佛智にてまします故に、一度びこの本願の不思議を信じたてまつれば、我等の宿業の深きことを自覺して、所謂そこばくの業をもちける身にてありけるを助けんと思召したちける本願のかたじけなさよと分るやうになりたのが、善惡の宿業を心得たのである。即ち本願の不思議を信ずれば、必ず善惡の宿業たることを心得るやうになるのである。心得るといふは、眞實業報たることを自覺することである。爾るに古來善惡の宿業を心得るといふことを、我々の所作は過去の業報ぢやと自分できめ込むことのやうに考へるもの故に、俗に所謂業報まかせて致し方ないといふやうな自然主義的な誤に陷るやうになるのである。我等は本願の御不思議なかりせば、決して善惡の宿業を自覺することは出來ぬのである。如來の本願は、我等過去善惡の業報に催ふされて流轉輪廻する有樣を御覽あらせられて、飽く迄見捨て給はざる不思議の本願にてまします故に、一度び之を信じたてまつれば、我等の善惡の所作卯の毛羊の毛の先きに至るまで、皆な宿業であることを自覺するのである。如來は我等が卯の毛羊の毛の先きにいる塵ばかりも作る罪の宿業にあらざるとなきを知召して、飽く迄見捨て給はざる本願の不思議、名號の不思議、佛智の不思議を信じ奉れば、自ら卯の毛羊の毛の先きにいる塵ばかりも作る罪の宿業にあらざるとなきを自覺するやうになるのである。『涅槃經』の文に、「世尊大慈悲、爲レ衆修二苦行一、如下人著二鬼魅一、狂亂多中所爲上」とある文を深く味ふに、如來は已に我等が所作は、皆な煩惱惡業の鬼魅に着せられて、狂亂所爲多きが如き有樣であること

とを知召して、一分も一厘も見捨て給はず、飽く迄御苦勞を下さる有樣は、又恰も鬼魅に着せられて狂亂所爲多きが如きである。斯の如き大慈大悲の不思議の御心を頂きたてまつれば、我等は中心深う滿足して一點も滯る所なく、功德の寶海みち〳〵て、煩惱の濁水へだてなくなりた有樣が即ち善惡の宿業を心得たのである。一分も一厘も自分の力では仕て見やうが無い、一々皆な業報に押へつけられてるのである。之を救ひ給ふ大悲の親心は一分一厘の先きに至る迄入り滿ちて下されて、全く自由にされたる有樣が、卯の毛羊の毛の先にいる塵ばかりも、つくる罪の皆な宿業たることを自覺したのである。

全體此の章は私には何とやらん理解されても臍落ちの仕ないやうな心地して居つた。殊に聖人の唯圓坊に向つての對話の如きは、何とやらん聖人が態とらしき事をこしらへて戯論せられたやうな心地があつた。併し之は大に恐れ多きことで、矢張り自分がそのやうな不眞面目な心地が有るもの故、最も眞面目なる御話を自分の機に任かせて笑談じみて考へるのである。私としてこの章を中心より所謂臍落ちして味ふやうになつたのは、越後の妙好人、宗右衞門の話を聞きてから、如何にもと落居するやうになつた。宗右衞門は越後新井在の無二の篤信者であつた。信濃飯山の山本幸右衞門といふ人は、宗右衞門につきて法を喜ばれた。幸右衞門が初めて宗右衞門を訪ねて行きた時、宗右衞門は其の妻に向つて、「信州より同行が來られた故御馳走をして上げて呉れ」と言つた。爾るに其の出來た御馳走は、大根を千束に切り煮て、鹽と「しいな」とを振りかけたものであつた。幸右衞門が之を見て之が「御馳走であるならば、平日は何を喰つて居るか」と感じたといふことである。實に平日は糠を喰つて而も米や金は皆な御本山に上げてしもたといふのである。そこで子供等を呼んで信州より同行が來られた故、御馳走の御相伴をせよと言ふた處、子供等は何れも溫しく美さうに之を喰べたとのことである。宗右衞門は食事の半に箸を差おきて、さて言ふやう、「幸右衞門殿、斯の如きうまきものを頂くは前世の約束に違ひます」と申したとのことである。前世の約束といふは、我等かつて惡道に墮したる時、若し再び人間に生れたならば、砂を嚙んでも石を喰つても法を求めると誓つたといふことである。實に私がこの話を聞きたるは、幸右衞門の孫なる山本幸吉方に於て、正に香魚の御馳走を頂きつゝあつた時、幸右衞門より直話を

聞きたる幸吉氏の老母より承はつたのである。實に慚汗脊を濕ほして、口の物も喉に通らなかつた次第である。この話に於ても注意すべきは、宗右衞門の法外の質素といふことよりは、前世の求道といふことを確信せる點である。和讃に、「三恒河沙の諸佛の、出世のみもとにありしとき、大菩提心おこせども、自力かなはで流轉せり」と。實に髣髴として其の趣が偲ばるゝ。また或時一人の廿四輩巡拜者が、宗右衞門を訪ねて一夜の宿を求めた。早速宗右衞門、幸右衞門と三人、爐の畔て鼎坐して、一夜深更に至る迄法を喜んだ。爾るに翌朝其の巡禮は眼を醒すなり、壁にかけたる宗右衞門の一張羅の着物をキト眺めるなり、忽ち盜心を起し、手早く之を疊込んで自分の笈に積め込み、匆々にして出立した。宗右衞門は目をさまし、着物を盜まれたことには毫も氣もつかず、早や既に巡禮の出立したるに打驚き、寢過して朝飯を喰べさして立たせなんだことを後悔し、そのあとを見廻せば、巡禮の烟草入が遺つてある。定めて不自由することで有らうと、早速これを持つてあとより追ひかけた。爾るに巡禮は、そこらに居る氣はひも無い。急ぎ行く程に、遙にその後姿が見えた。聲を限りに呼び止めた處、豈計んや後を顧みながら益々足を早めてゆくのである。然るに川の渡し場に來りた故、とうど追ついた。そこで宗右衞門は朝飯を喰べさゝなんだことを詫び、また定めて不自由であらうといひて、烟草入を差出した。然るに巡禮は赤面して頭を下げたなり、よく物も言はぬ。稍ありて思ひ切つて自分の出來心を懺悔して、あやまり果て、笈より着物を取出して差出した。宗右衞門は之を見るなり、忽ち深く感じたる面持ちをして、さて言ふやう、「あゝ然うであつたか、夫れは確かに前世に於て、お前に借りて置いたに違ひ無い。定めて長々かりて居たことであらうと、」つと袂を探りて一歩銀を取出し、其の着物の上に載せ、之は僅かばかりであるが、利息である、納めて下されと言うたとのことである。巡禮は恐懼戰慄おく處を知らず、平蜘蛛の如くあやまり果てた處、宗右衞門はふり顧りも見ず遁げ歸つたとのことである。巡禮は深く其の罪を謝して渡し守に托し出立をした。夕方にいたりて渡し守は、着物と一歩金を携へ來つて宗右衞門に渡し、「巡禮も恐入つて貴方に之を返して呉れと言うて立つて行きました。貴方の物ぢや取つておきなされ」と申した。爾るに宗右衞門は之を見るなり眉を顰め、「あゝまだ前世の業が盡きぬか」とかこちつゝ、遂に此の着物を賣り、一歩銀もつ

けて本山に上げてしまつたとの事である。そこで後に渡し守が宗右衛門に尋ねて言ふやう、「貴方の行ひのえらいことは、今更驚くことは無いが、分らぬのは彼の巡禮の所業である。全體御開山の御舊蹟や、廿四輩を巡拜しやうといふやうな者が人の物を盗むといふは何事である。聞けば其の前夜皆んなが非常に法を喜んだといふては無いか。それに朝起きるなり、貴方の物を盗むといふ心が起るといふが怪しからぬ。一體之は何うしたものぢや」と、聞いたとのことである。そこで宗右衛門は、「それは言ふべきことでは無い、如何にもお前のいふ如く御舊蹟に參詣するやうな人であるから盗むといふやうな心の起らぬ筈ぢや。夫れに現に其の心の起つたのが不思議ぢやないか。之が前世の業報と申すものぢや。わしが前世で借りて置いたものなれば、其の時節が到來すれば彼は取り返さねばならぬ、私は返やさねばならぬが業報である。決して善し惡しは言ふ可きことでは無い」と斷言したといふことである。

私はこの話を聞いた時、成る程と合點をし、此の『歎異鈔』の十三章の「よきこゝろのおこるも善業のもよほすゆゑなり、惡事のおもはれせらるゝも、惡業のはからふゆゑなり。故聖人のおほせには、兎の毛羊の毛の先きにいる塵ばかりも、つくる罪の宿業にあらずといふことなしとしるべしとさふらひき」との意味が渙然として氷解することを得た。（以下次號）

時報

求道講話概況

求道學舍日曜講話（聽講甲記）

九月二十日。快晴。殘暑甚し。先生は無學夏季傳道を終へられ、今日は主として其間に於ける感想を述かる。詳細は前號に「傳道所感」と題して、先生自ら記し給ふ所あれば、茲には敢へて述べず。たゞ最後に、三田尻にて暴風雨の中を犯して、運送船の強行せるを目擊して切に臨海軍の勞苦を思ひ、夫に付けて我が國民は今回の戰爭を動もすれば輕々しく見なすの傾あるも、之れ其だ非なり。戰爭は慘事なるも人生に於て免るべからざる所、かゝる罪惡の我等を見捨て給はざる御慈悲ぞと確信したる上は、最も眞摯に、最も嚴肅に之を行ひ、決して憂滿ち心驕るの態度あるべからざる事を深く感じたる旨を説かれしは、時節柄吾等の爲に有難き教訓なりき。

九月二十七日　曇。冷氣大に加はり、身心自ら肅然たり。例題開講「超絶の力」と題せらる。大經下卷に「心得超絶去、乃至自然之所率」とあり。如來の本願は世に超絶したる力にてまします。世に超絶したる力といふは、たとへば親が子の過ちを見て叱り意すは、あたりまへ許すべき事にあらざるが爲なれど、心の内ではさは思はぬが如く、如來の本願は到底助け能はざるものを一しほあはれみて助けんと思召し立ち給ふ御慈悲にてまします故に超絶したる力なり。予が今度歸京して見れば多くの人が暫らく聽聞せぬ内に苦しくなれりと歎かる。此れは信仰が實際問題に沒頭し居る故なり。吳々も本願はこの人生の諸問題に超絶し玉へるを知るを要す。又求道の人々が「どうにも喜べぬ」、「ハイと返事が出來ぬ」といはるゝも、佛の慈悲は、かく喜べぬもの、ハイと返事することのならざるものを殊に哀れみ給ふ世に超えたる御情なるを知らざるべからず。又如來の本願は吾等をして世と超絶せしめ給ふ力にて在す。御慈悲を頂けりと稱するも、若し人生凡ての問題より拔け出づる事能はざるならば、未だ眞實の信仰には非ず、他力信仰の味は慥に横超斷四流なり。されども又一方に於ては不斷煩惱なり。不斷とは

自ら斷ぜざるを云ふ。かゝる煩惱の纖微なるものをよくもくと喜ぶとき自ら退轉分を得たてまつるなり云云。講話後信仰談話會あり。有馬氏夫人の告白あり、又本年夏季講習會以來御絲を結ばれたる横濱某老人へ對し、先生より懇ろに諭し給ふ。

十月四日。晴。秋晴の爽快最も聞法に適す。講題「自然と律法」吾人が平日の思想上心の赴く處に任せんとするは自然なり。善くせざるべからずと思ふは律法なり。この何れもが行きつまるものなる故、そこに救濟の道生ずるに至る。今歎異鈔第十六章につきてこの味を述べんに、同章には先づ「信心の行者自然に腹をもたて乃至隨惡修善のこゝちか」とあり。此の文の中に自然と廻心の二語あり。其意講題に同じ。實に此兩樣の傾向は人生全般の問題の上に顯る。即ち日常の些事より思想問題、生死問題に至る迄畢竟この二傾向の外に出でず。而して吾人は平生此の矛盾の間に狹まりて、喜ら痛苦に呻吟しつゝあるものとす。しからば吾人は如何にして此苦境より救濟さるべきか。歎異鈔の次の文に曰く、「一向專修の人に於きては乃至廻心とは申候へ。この本願他力眞宗といふこと肝要なり。眞宗即本願他力なり、如來の眞實なり。眞實とは如何。これは平生常に云ふ眞實ならぬものを迷に見捨て給はぬ眞實なり。吾人が心まかせにすべしといひ、又は善くせざるべからずといふも、畢竟自己本位より割り出せる不實に外ならず、而して佛はこの不實の外に出づるに道なきものをなことに哀れみ給ふ。吾人其眞宗の喚聲に目さむるとき、始めて今日迄日比の心のあやまちを知りて、蘇然心をめぐらし、佛の惠に歸する之れ救濟なりとて、多くの實例を引きて聖教の意を解き、又求道者の指針を與へられたり。

十月十一日、快晴。冷氣身に泌み、前庭の楓樹既にやゝ紅葉せり。講題「聖尊の重愛」。今日は此題に就きて一念並に後念の有樣を述べんとす。昨日九段にて攝取不捨の意を述べしが、今日の題意も略其れと同じく、寧ろ攝取不捨の味を語すと云ふ方適當なるべし。抑も佛の御心が眞實我々の心に屆きて、其の御心に我々が目覺めたるときは、今迄佛の心を知らざりし昔とはうつて變り、恰も夜が明けたる如くなり、其時に攝取不捨の利益に預る。他力信仰に於いて至極とも云ふべき味は一念のときに攝取不捨に預ることなり。然るにこの攝取不捨といふことを解して、吾等は始めより心光の中に在ることを意味するものとし、從つて吾等がこの心光中に攝護され居ることに氣附くを信仰なりと言ふ人あり。されどこれは甚だ不徹底なる言分にて、信仰には前に云へるごとく、慥かに其一念に際立ちて攝取の益を蒙るなり。然るにかく云へば又他の極端に走りて、強いて一念を際立てんとして秘事法門的の思想に陷るものも亦少からず。信仰には常に此二面あり否單に信仰の上のみならず、人生すべての問題は、強め自らきめこみて安んじつゝあるか、又は絶えず苦心焦慮して或るものを求めつゝあるかの二つに歸す。されど前者の阿片的鎮靜も終には破れ、後者の努力主義も結局行きつまり、如何とも致し方なきに至る。このときあらはれ來る道は如何。人かゝる窮境に立ちしとき、自分にてどう思ふ、かう思ふと云ふに非ず。外界にも内界にもよるべなき我等に對し、之れを覩ほし、その苦痛を察して、惡しければ惡しきだけ、不實なれば不實なるだけ、其者に對し憐みを以て眺め、眞實を以て向ふて下さる、唯一の御親ましますといふ事此の御慈悲の一道の外何物もあるべからず。前後左右に進むべき路の絶え果てたる我々に對し、如何なる御親切にや、その者を猶も見捨てられぬと仰せ下さるゝ御慈悲を聞く一念、何人かゝる有難しと喜ばざるものあるべき。かく突き當りて仕樣なきものを見捨て給はざる廣大の御心かと始めて御慈悲一づに接が明けたる樣が、眞實の念佛の衆生、その念佛の衆生を喜び迎へ入れ玉ふが攝取不捨なり。歎異抄初章に「彌陀の誓願乃至あづけしめ給ふなり」とあるは即ち之れなり。而して此一念の信起りぬれば其後如何なる事變に臨みても、再びこの御慈悲より洩るゝことなし。之れ亦攝取不捨なり。信仰の後にも貪欲瞋恚の水火は絶えず菩提の道を犯し來れども、信仰の一念に一たび四流を超昇させて頂きたる印には、これらの煩惱も長續きはせて、却て、かゝる惡しきものなればこそと、愈々御慈悲を喜ぶ便となる。歎異鈔の第十四章「攝取不捨の願を云云」の文、同第十六章「攝取不捨の誓願は空しくならせ云云」の文よく〳〵味ふべきなり云云。

十月十八日　曇。雖者所用ありて參聽を欠く。

十月二十五日　晴。秋いよ〳〵深く、天地蕭條たる中にも、一たび惠の光りにもうあひたる同朋は、心のうち言ふに言はれぬ喜びと、顯みとをもちて、この席に集ひ給へるなるべし。今日の講題は「唯願念佛衆生」といふにてありき。或る人が「佛とは何か」と質問さる、實にこの問は信仰問題の最始にして又最終なり

唯念佛の衆生をみそなはして攝取して捨て給はず、故に阿彌陀と號し奉る。この意味が眞實わかれば信仰なり。佛とは眞實われらを助けまします御親なりときいてあゝかゝる罪業の私をかくまでに思召し、憐れみて下さるはたゞ阿彌陀佛計りと御慈悲一つを頼みとし力とするに至れるが、これ念佛の衆生なり、眞の信仰者なり。しかるに或人は又、『私は御慈悲を喜んでは居りますがどうかすると心の中で「待て」といふ聲が聞える』。もし本當ではあるまいか』とあやぶむ氣が起ると云ほれしが、これにては不可なり。曇鸞大師は如實修行と說かれ、如實修行とは、如來は實相身なり、爲物身なりと知るなりと釋せらる。容觀とか主觀とかの議論の入るべき餘地なし。この私を飽まで見捨て給はぬ佛なりよき人の仰せのまゝが唯一のたのみ力となりて下さるゝが如實修行なり、眞の安心なりと述べられ、最後に久し振りに西川氏入信の模樣を說かれ、有難き限りなかりき。時も爲にやいうつりたれど、今日は最後の日曜なればとて少時談話會を開かれ、某夫人の子を失ひしより一しほ御慈悲を喜ぶ身となれりとの告白ありき。

第二求道會土曜講話（聽講乙記）

七月四日　題は「願力自然」なり。人間は思ふまいと思ふ事を思ひ、してならぬと思ふ事が出來て來るのである。處がそれを止めよと云ふても止まない。人が馬鹿と言へばきつと馬鹿と言ひ返へし、何時迄でも腹を立て五分〳〵で爭ふて行こうと云ふ根性が止まぬ。實に淺間しいものである。然るに一一向專修のひとにおいては、廻心といふことたゞひとたびあるべし」佛はそういふ惡い心の止まない淺間しい者じやと云ふ事を御覺じて、それを哀れと思召し下さるのである。吾々がこの本願他力眞實を聞かせて頂けば「日ごろのこゝろにては、往生かなふべからずとおもひて、もとのこゝろをひきかへて本願をたのみまゐらするなこそ、廻心とはまうしさふらへ」惡るければ惡いほど哀れと思召し下さることの有難いと遂に廣大な御慈悲を頂くのである。斯く廻心をした一念に佛の惠を頂く事によりて一期に一度の廻心が起り、本願力の自然が現ほれて下さるのである。すなはち願力自然とは吾々の氣まかせの自然でもなくまた自分の力で善くすると云ふ事でもない。云々。第二求道會は本日を以て夏季に於ける最終の會となり、明日よりは第四回夏季求道會開催せらる。（以上夏季休講以前の分）

九月十九日　先生夏季御傳道の間、久しく休會したるが愈〻地方より御歸京、今日初めて開講せらる。快き秋晴れにて聽衆は久々にて相見へ喜色溢る。題は「信仰的立場」なり。從來信仰を正面より說いて斯る題を掲ぐること少なし。斯る題に依ると先づ信仰といふことを味はずして信仰的立場とは何ぞといふこと即ち其結果を考へんとする弊に陷り易い。信仰を味つた上に自然の結果として信仰の立場が現ほるゝのである。信仰は人生を離れて味ふことは出來ず人生の日暮しから味はねばならぬ。此夏諸方に巡りた土產話の澤山な中から實例を順次話そう。第一の問題は人生はお互同志寄合ひて互に心が合はぬとか思ふ樣になるとかならぬとか云ふことである。然るに到底人生の上て滿足が得られぬ爲めに信仰を求むる樣になる。處が信仰を得れば人生がよくなると云ふ幻想が離れないのである。京都で夜を徹して話した時東京で常に聞いて居られる人が來た。その人曰く學校を止めて居ます。養家を出て來る樣な者は學問しても駄目だと祖父が言ひ、父もそれに逆らへない。兄は私が同情が無いと申します。斯く言ふのを聞いて自分ほふと氣附き、それはいかん誰が同情があるのないのと云ふ樣なことを言ふて居ていはかんと申した。人から迫害を受けて人生に全く頼りを失つた人が途ていちめられて居る子供を見て可愛相だ、抱き上けてやろうと思つた時是は自分の身の上てあることに氣附いた。人生に於て我等が苦しみ人に同情を求めても駄目であるのを哀れと思召し下さるが佛である。我等が苦しむからのお慈悲てあると話した。その人は始めてお慈悲に氣附いて感泣しこのお慈悲を頂いた上は如何に苦しい事があつてもよいと申した。次に善くやるのてあるといふ律法主義も同樣てある。人生に於て自分がよいと思つて居たが間違ひてあると氣附くと今度は自分が惡い〳〵となる。然し惡い〳〵と言ふて居るだけてはいかぬ。親は子供の惡戲を見てたゞ惡いとは思召さず却つて頑是ない可愛相なものだと思ふ。吾々の不實なと云ふことが可愛相てあるが故にまことてない者を見捨てられぬと云ふまことが佛の眞實てある。まことならざる者が見捨て給はざるまことを聞て見れば其おまことが頂けるのてある。佛のお慈悲は自已の境遇の上て頂かねばならぬ。人生の淺間敗い立場を止めて別の立場を得ることは出來ない。此不實の者を見捨てぬ廣大な御慈悲を頂かして貰ふて惠の上に安んじて人生の事を行ふのてある。然れば人生の事に眞の眞面目と云ふことが現ほれて來る。善く出來ぬことには深く漸悔して南無阿彌陀佛一つに安んじ、一舉一動皆信心の上から働かして貰はねばならぬ。是が信仰上より生ずる立場てある。云々。

近角常觀著

懺悔錄 附錄『歎異鈔』

第八版　定價二十錢　郵稅四錢　袖珍美本

本書は著者が實驗の信味に基づき從來求道者の金科玉條たる『歎異鈔』の眞髓、惡人救濟の眞意義を闡明せんが爲に編述したるものにして、著者は先づ自己の經驗に筆を起し、半歲以上胸中に鬱積して寸時も止まざりし煩悶の實狀と其後に佛陀攝取の慈光に接して人生の黑闇頓に一掃せる感謝の實感とを最も眞率精細に告白し、更に進みて之を王舍城の悲劇に照し、又著者が實驗を聞きて獄中安慰を得給へる某氏の實例に見、人間何人と雖も如來慈光の下唯一救濟の一道ある所以を叮嚀懇切に詳述したり。蓋し是れ『懺悔錄』の名ある所以にして一讀入信の人少からず。

人生と信仰

第五版　定價卅錢　郵稅四錢　袖珍美本

◉第一章　人生問題と信仰　◉第二章　悲觀思想と信仰
◉第四章　犯罪心理と信仰　◉第五章　社會問題と信仰
◉第七章　世界宇宙と信仰　◉第三章　倫理力行と信仰
◉第六章　國家秩序と信仰

本書內容は目次に示すが如し。先年『求道』秋季號として發行したるもの、近時四方同胞諸子の需要益々急切なるため、再び茲に一冊として刊行するに至りぬ。蓋し現代思想界の亂調は律法的教訓、若しくは物質的施設を以て根治する事難かるべし。獨り信仰により根本的に自覺して、初めて解脫せる眞人生に入る事を得ん。是れ本書ある所以也。人生問題の解決に志ある諸君の一讀を冀ふ。

▲以上の二書は是非どなたも讀んで下さい

發行所　東京市本郷區森川町一番地　振替口座東京一六六九六番　求道發行所

▲山邊習學著 聖者の後から 金七十錢 郵稅六錢 ▼

「暴君は我が頭を刎ね得べし、されど我が精神の自由を奪ふ能はず」。此語、何ぞ偉大なる、何ぞ勇壯なる、エピクテタスは力の人なりき、元氣の人なりき、自由の人なりき、心弱くして煩悶苦惱に束縛せられつゝある我等に對するエピクテタスの敎訓は利劍の如し、能く妄念の槃縛を解く。力を給へ、元氣の德音來れ、自由の天地現せよとは野に叫べる聲なりき。エピクテタスの訓言は實に之に對する救濟也。

エピクテタスの敎訓

三六版 布綴 天金美本 金七十錢 郵稅六錢

清澤先生曰く、「余は心に煩悶起る時、エピクテタスの語を誦せば、煩悶忽にして晴るゝを覺ゆ」と。我等先生を慕ふ者先生の如く、エピクテタスに依りて煩悶を去るの道を求むる亦快ならずや。我等は本書を坐右に供へて常に服膺せざるべからざる也。

改版第四版發行するに當り難解なりし本書に對し特に先生に改譯を乞ひ平易なる文章となせり……

……發行者謹白

▲安藤州一譯 ソクラテスの敎訓. 金七十錢 郵稅六錢 ▼

曉烏敏著 淵落 金七十錢 郵稅六錢

稻葉昌丸先生改譯

東京巢鴨二ノ三五 無我山房 振替東京三一二二